布石通解

第二卷

246
2
258

子爵 京極高德題字
五段 佐野岩鉉講述
樂石 胡桃正見編輯

布石通解

第二卷

東京
棊界新報社

宋
點
明治
45 19
内公

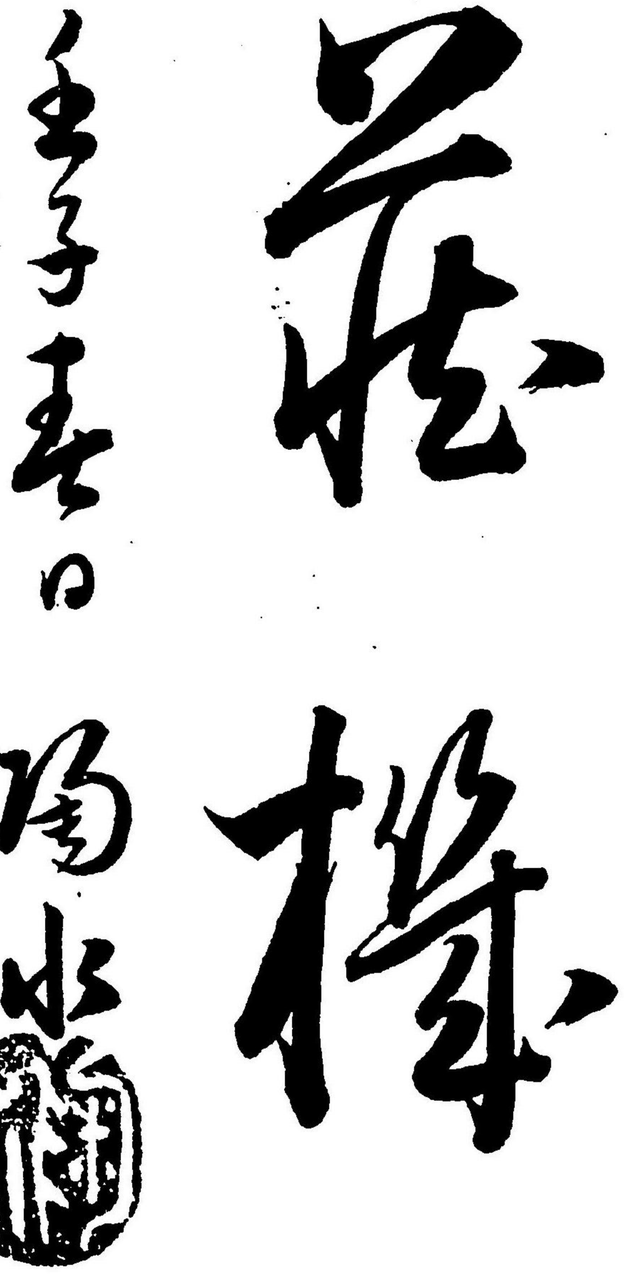
布石通解第二卷

五段岩佐銓講述
樂石胡桃正見編輯

互先の部十五局

内容

第一局　第一卷の白八の手より變化　第二局　既說白八の手より變化　第三局　前局白八の手より變化　第四局　前局黑七の手より變化　第五局　既說白六の手より變化　第六局　前局白八の手より變化　第七局　前二局白八の手より變化　第八局　前局白六の手より變化　第九局　前局白六の手より變化　第十局　前局黑六の手より變化　第十一局　前二局白六の手より變化　第十二局　前局黑九の手より變化　第十三局　既說白六の手より變化　第十四局　前局黑七の手より變化　第十五局　前局黑九の手より變化

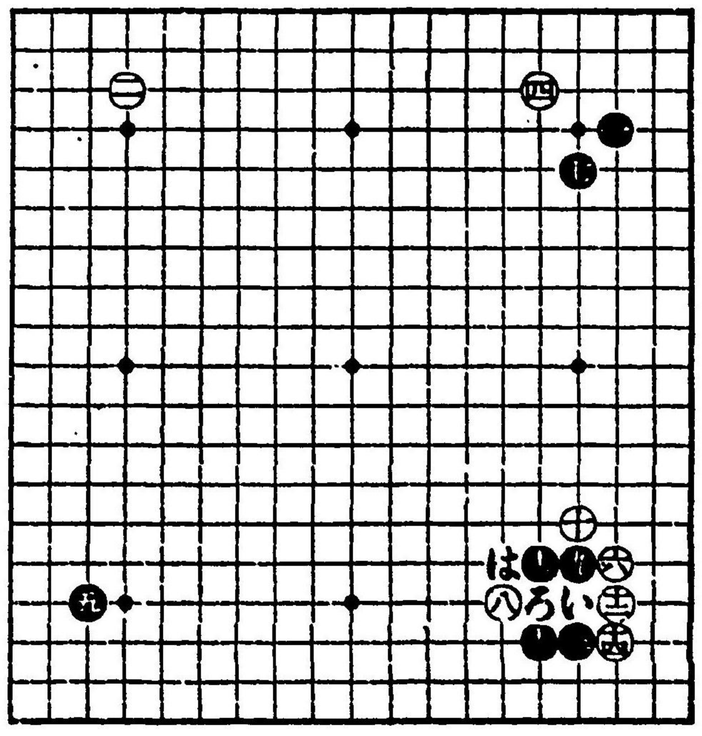


第一局

本局は、第一卷に收めた八局における白㊅の手よりの變化で、この㊅の手は、前八局のやうに、開くのが普通であるけれども、しかし、開かないとすれば、この手で種種と趣向すべきもので、則ち第一圖の如く大桂馬に掛けるなどは、その趣向の一つである。

この時黒が㊆と附けるのは、普通の受手であるが、白㊉の手は、時として趣向で打つ手で、この場合には善い手である。普通は㊉の手で「い」に跳込み、黒「ろ」の時㊀に繼ぎ、黒が㊁に繼げば㊂の處に切り、黒も亦「は」に切つて變化するのであるが、一と二と圖の如く打つてある場合には、黒は「は」に切らずに、㊉の處に伸びて來る。そこで、白㊃黒「は」と打つて、この定石がをはるとになれば、つまり、白の方が幾分か惡いことになるから、それで圖の如く㊉と跳ねたのである。

白㊀の時、黒が㊁と並ぶのは善い手である。この手で㊃の處に抑ふれば、白は「い」に出で、黒が「ろ」に抑へた時㊁の處に切る。さうすれば、黒がイケナイことになるから、心得ておかねはならぬ。白㊃は、いはゆる「三ノ三」と名づける大場で、いづれから打つても、非常に大きい處である。



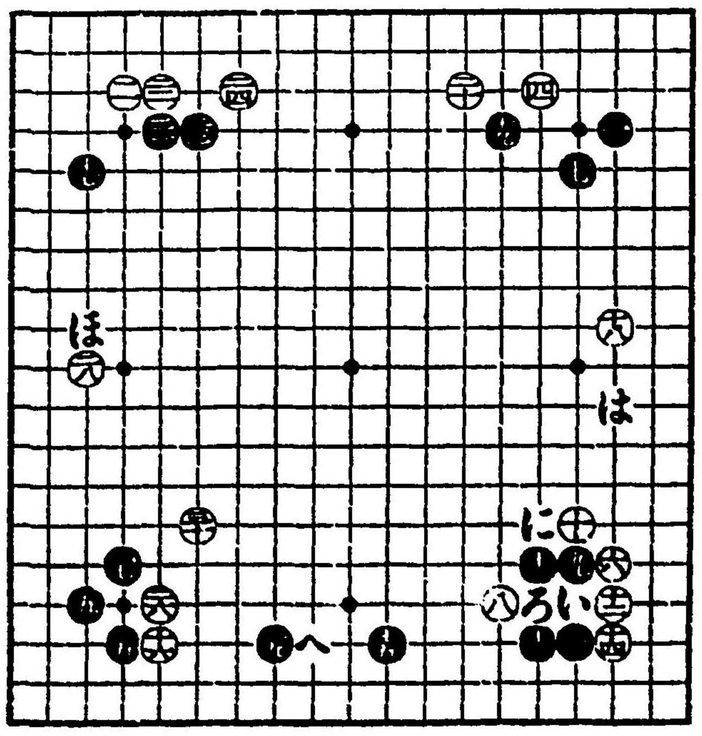
（第一圖）

第二圖に於ける黒㊁は、善い手である。斯る處は、白が「い」に出で、黒が「ろ」に繼いであるものとして考ふべきもので、さすれば、恰度三間に開いた譯になるのである。

さて又黒㊂の手は、この手で㊄の處に掛け、白を㊂に飛ばせて、「は」に開いて打つなども善い手である。

白㊅は大場を占めた譯で、一見廣過ぎるやうであるけれども、「に」の押しが利いてゐる處だから、このくらゐに開かないと、却つて狹過ぎるのである。白㊂の手は、「ほ」に夾んでも惡くはないが、㊁の石が低い處に在るから、ここでは圖の如く平凡に受けて、黒に手段をさせて、餘して打たうといふ趣向である。

さて又黒が㊃と尖附け、㊄と尖むのは善い趣向である。ナゼならば、㊁の手で㊂に尖むのは、㊃の石が輕い石であるから働きがないし、又㊅の邊に打ちたいけれども、さすれば、白より㊂に掛けられて、位が低くなつて面白くないからである。それゆゑ、圖の如く先づ㊁と尖附けて、白に㊅と立たせて重くしておいて、次に㊂と尖めば、白が圖の如く㊅と割打をしたところで㊄と夾むし、又白が㊅と打たずに「へ」に開けば、㊅の處に打つといふ譯で、いはゆる雨天秤になつてゐるからである。



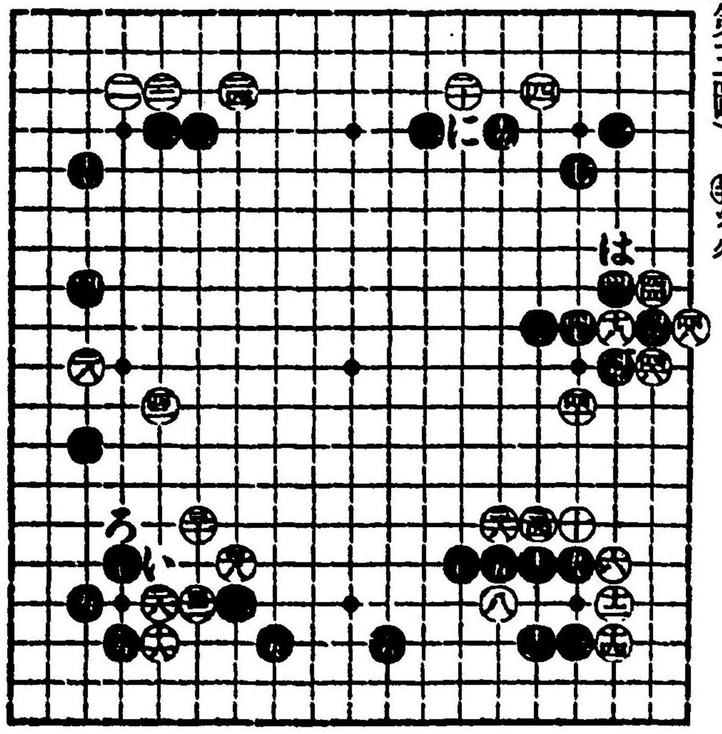
（第二圖）

第三圖に於ける白㊸の手は、一見愚形のやうであるが、この場合善い手である、この手で『い』に添へば、黒に『ろ』に伸びられて氣が利かぬことになる。又白が㊸㊹と押すのは、㊻と跳ねるつもりがあるからで、善い手順といはねばならぬ。

かくて、黒が㊻と帽子に打ち、㊼と詰め、以下㊽より㊾まで打つておいて、㊿と掛けたのは、活潑で大に善い手段である。普通は㊿の手で『は』に引くのだけれども、さうすると、白に『に』に押して來られるから、圖の如く㊿と掛け、白の受方によつては、『は』に引く筈となるかも知れぬが、白は受方に一寸困るのである。ナゼ困るかといふと、黒に㊿と掛けられると、いづれに變化しても、白の位が低くなるからである。

さて㊿までの結果、本局も亦白の薄い筈であるから、黒は先著の効力十分である。

（第三圖）

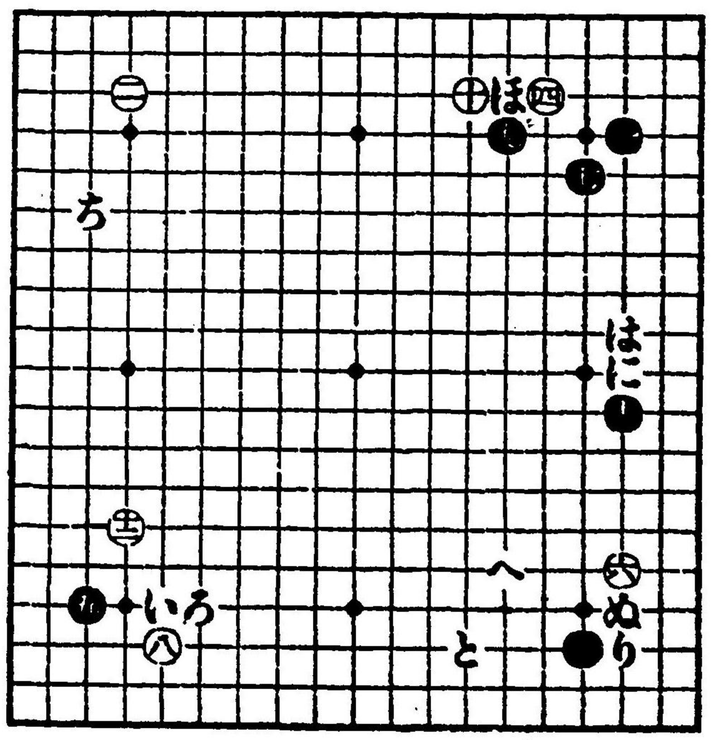


第二局

本局も亦、前九局における白㊽の手よりの變化で、第一卷に收めた八局は、いづれも、第一圖のやうに黒に㊿と夾まれるのを嫌つた石立であるが、本局は、夾まれても打てるといふので、㊿の石に掛つたのである。尤もこの㊽の手は、『い』に掛る手も、『ろ』に掛る手もあるが、この時黒が㊻と掛け、白に㊼と受けさせておいて、㊿と夾み且つ開いたのは大に宜しい。若し白㊽の手で、『は』の邊に開いたやうな場合には、㊿の掛けを見合はすべきであるが、㊿と廣く開き且つ夾み得る場合には、位を取るために、圖の如く一著掛けておくべきものである。その時、白が若し㊼と受けずに、『は』若くは『に』の方に開けば、黒は直に『ほ』に抑へ込んで仕舞ふのが宜しい。ナゼかといふに、白が㊽の手で『は』若くは『に』に開き、黒が㊻に掛けたとすれば、白は無論㊼と飛ぶべきであるのに、㊼と飛ばずに㊽と掛つて、『ほ』に一子を取りきられたも同じであるから、白の損は明かである。これ則ち、黒の㊻と掛ける所以で、白も亦㊼と受けるのを至當とする所以である。

さて白㊿の手は、この場合非常にムヅカシイところで、白を持つては、ここで何とか趣向をして打たぬと、敗けることに定つてゐるやうなものである。そこで白は、㊿

（第一圖）



の手で「へ」に飛び、黒に「と」に受けさせて、「ち」に繋つて打つのも亦一つの趣向で、いづれを選んでも構はぬが、本局は、圖の如く大桂馬に掛けて、趣向をしたので、その意は、黒に「ぬ」に尖附けられてイヂメられては面白くないから、先づ左隅を拵へておいて、然る後右隅に先鞭を著けやうといふにあるので、それには、大桂馬に掛けるなどは、先づ當を得たものである。

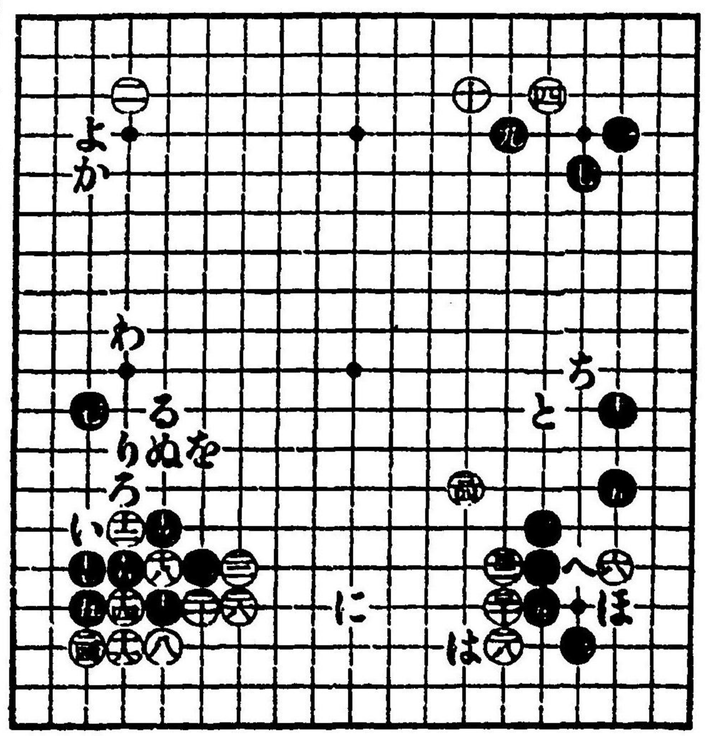
敵の手數と、我手數とを委しく算して、我石二目、敵石二石ならば、我石を無きものと思ひて、吝まず棄つべし。また敵三手に我二手ならば、いづれ一手だけ悪しと思ふべし。初心の人は、手數いささかにてもよきやうにとうつものなれば、本來無理なる故、終に大敗をとるなり。故に黒石を握りては、必ず此方より戰を仕掛けることなかれ。

（幻庵因碩の「孝義錦夫強碁」の一節）

白に㊀と掛けられた時、黒は㊁の手で如何に應ずるのが善いかといふと、第二圖のやうに附けるのが普通である。しかし、この場合㊁の處に尖附ける手もあるが、さうすると、白は㊂に抑へ、黒「い」白「ろ」以下の定石を打つて、先手で「は」に夾み、黒が㊄に尖み出した時、「に」に圍つて打つことになるので、これも宜しい。そこで、㊅と附けたとすれば、㊆までは定石であるが、黒は㊇の手で「ほ」に尖附ける手もある。さうすると白は「へ」に伸び、黒が㊈の處に桂馬すれば「と」に帽子し、黒が「ち」に受けた時、「り」に一間に飛び、黒が「ぬ」に附けた時「る」に跳ね、黒が「を」に伸びた時「わ」に桂馬継ぎをなし、黒が「か」に掛れば、「よ」に尖附けて攻めやうと構へるのである。ゆゑに黒は、そんな餘計なことをするよりは、これまでに得をしてゐるのであるから、普通の定石通りに打つて、白に手を譲る方が宜しい。

白㊉は善い手で、もとより㊀と掛ける時から、斯く打つか、「は」に夾まうといふつもりなのである。だから、この手で㊄に掛けたり、㊇に飛んだりすれば、㊀の主意を丸で沒却して仕舞ふことになる。黒㊄の手は、この場合㊈に附けてもよいが、しかし、かく打つ方が分り易くて宜しい。さて㊇㊈となつた結果、白地は非常は廣いやうに見えるけれども、一方地で口が明いてゐるから何程もないのである。

（第二圖）

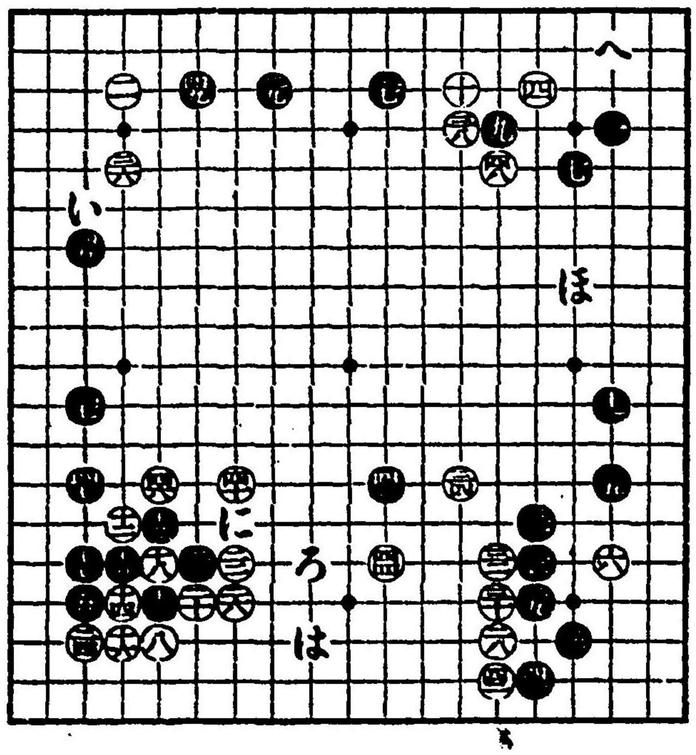


●劫トル　○ヲッグ

第三圖における白㊇の手は、いはゆる大場であつて、此處では㊀の石があるから、「い」に締るよりは、圖の如く高締りの方がよろしい。白㊁の飛びも大きい手で、㊂の手まで勘定に入る譯である。若しこの手を打たなければ、黒より「ろ」に打たれ、「は」に受ければ「に」に跳ねられて、地を消される筋があるし、さりとて、白より確と地にする手もないから、この邊で飛んでゐるのが善いのである。黒㊃㊄は手順といふもので、白㊆は少さいやうであるが、いはゆる本手といふもので、八方にらみの非常に大きい手である。黒㊅も亦善い手で、この場合急いでもいけないし、それに、㊆と白が用心したのであるから、黒も亦用心しながら、㊈㊉の石に迫つて、遙かに㊃の石に勢援を與へた譯である。

かくて白は、「ほ」の邊に打込むやうな手もあるし、「へ」に打つて「ほ」の方に打たせる手もあるし、又㊅の石にも幾分か味があるので、黒の善い棊には定つてゐるが、また侮りがたい棊で、面白い局勢である。

(第三圖)



第三局

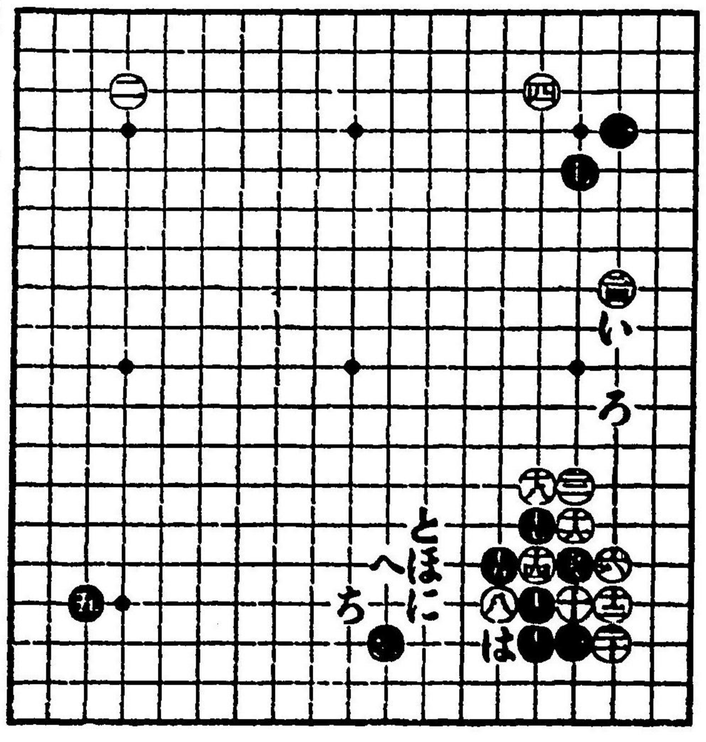
本局は、第二局における白㊅の手よりの變化で、第一局から見ると、白㊀の手より變化を試みた譯である。

そこで、この㊅の手は、この手で、第一卷の八局までのやうに、第一圖の「い」若くは「ろ」に開けば、黒に㊀や㊅の方に打たれるから、それを嫌ふために斯く掛けて、黒の樣子を見るといふ意味で、つまり、「い」若くは「ろ」に開いたのと同じ意味である上に、第二局のやうに、黒に「ろ」の方に夾ませまいといふ、二つの意味を兼ねた手である。

黒㊆の手は普通であるが、この手で㊀に尖附け、白が㊁に抑へた時、「は」に跳ねて打つても宜しい。黒㊂の手は、㊀とある場合には、㊂の處に伸びて打つても差支ないが、圖の如く打つ方が、紛れがなくて宜しい。黒●も亦穩當な善い手である。棊によつては、この手で「い」に打つこともあるが、しかし、先を持つては斯く打つ方が宜しい。

白㊇の手は、以前は「い」に打つたものであるが、それでは黒に響かぬから、圖の如く一路を進めたので、最初から黒が㊁と打てば斯く打たうといふ趣向なのである。然らば、若し黒が㊁の手で「い」に打てばどうするかといふに、その時は、白は「に」に飛び、黒が「ほ」に附けた時「へ」に跳ね、黒が「と」に伸びた時「ち」に繋いで打つので、さうなるよりは、黒は圖の如く打つて、淡ましてゐる方が善いのである。

(第一圖)



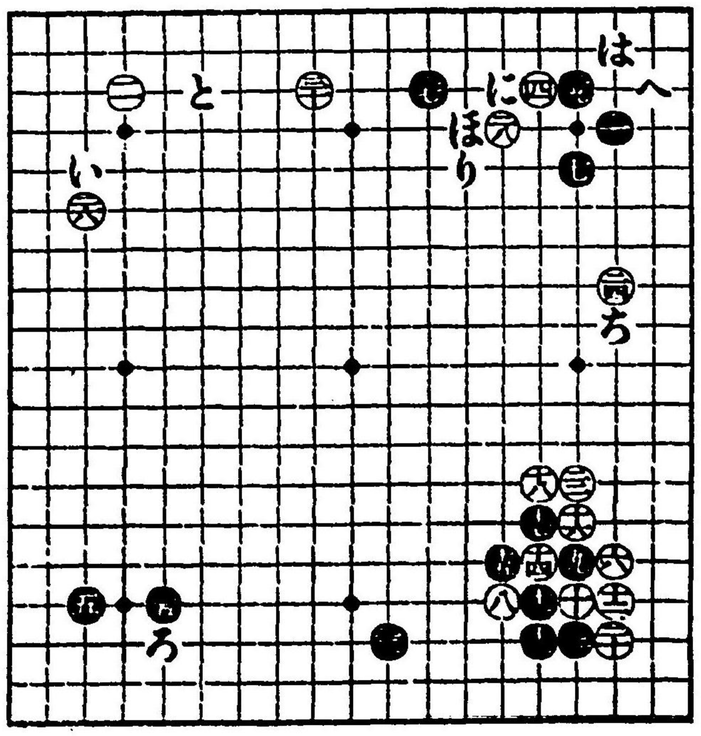
㊀劫トル　㊁同ッグ

第二圖における黒㊀の手は、いはゆる大場である。勿論この手で「い」に掛る手もあるが、圖の如く締つて置く方が宜しい。ナゼならば、黒が「い」に掛れば、白も亦「ろ」に掛つて來るは必定で、さうすると、黒は㊁の石があるので、一寸夾みにくくなるからである。

白㊄の手は、黒が締つたから、白も締つたといふ譯で、やはり大場である。黒㊂は善い手で、白㊅は止むを得ぬ手である。白は㊅の手で「は」に打つこともあるが、この場合では黒より㊅の處に掛けられ、白が「に」に出れば黒は「ほ」に引き、白が「へ」に尖んで活きにつけば、黒は「と」に詰めて打つことになる。さうすると、白は㊀の石が一路進み過ぎてゐるだけ、面白くない譯である。元來白が「へ」に尖んで、隅に活きる以上、㊀の方面に白の在るのは、黒の地を兩方から消す道理で、面白くない上に、㊀の石が「ろ」にあれば、まだしも大したことはないが、圖の如く一つ出過ぎてゐるから、尙更面白くない譯で、これ即ち、圖の如く㊅と尖んだ所以である。

黒㊆の手は、㊂の處に開く手もあるが、さうすると、白に「は」に打たれて面白くないから、先づ此處を治まつて打つのである。白㊂は、「り」に尖むのが本手であるけれども、さすれば黒に㊂の處に開かれて面白くないから、圖の如く詰めて、黒と共に逃出さうといふ趣向である。

（第二圖）

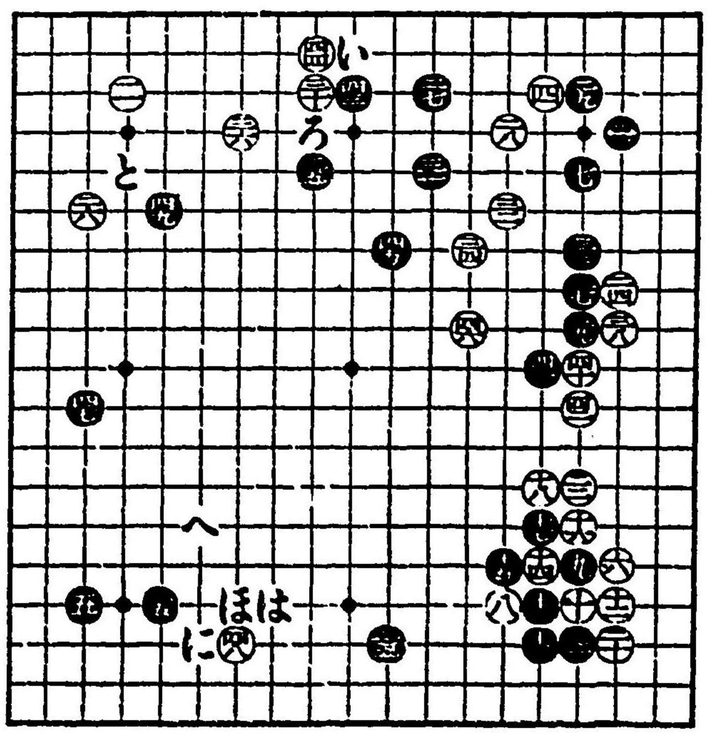


第三圖における白㊀の手は、㊁に押したいところだが、さうすると、㊃㊄㊅の石が弱くなつて、却つて手が戻ることになるから、圖の如く尖んで、㊂㊃の黒を、幾分かせつてゐるのである。黒㊀白㊄は普通の應接であるが、㊂㊄㊅と打つておいて、㊁と附けた黒の手順は味ふべきである。

白㊃の手は、この場合止むを得ぬ譯で、若し普通の如く「い」に跳ねれば、黒に㊀の處に切られて面白くないし、さりとて「ろ」に突當るのは、俗手でマズイから、かく下つて黒の樣子を見るが宜しい。その時黒が若し㊅の手で「ろ」に突當つて用心すれば、白は手を拔いて打つのである。黒㊁はいはゆる大場で、萬によつては「は」に圍ふともあるが、さうすると、白に㊅の方に打たれた上、後には往往手が附いていけないものである。白㊄の手は、黒に㊅と打たれた以上、今急に黒を攻める手段もないから、かく打つて、この地を消すより外に道はないのである。

黒㊆の手は、「に」に尖附けて、白が「ほ」に伸びた時「へ」に打つて、㊄の白を攻めて打つ處だが、先づ圖の如く打つて、白の受手を見てからの方が宜しい。そこで白は、㊄の石を始末するものか、はた「と」に受けてゆるゆる打つものか、この邊が頗るムヅカシイ處で、これから先きは、各自の力で打つのであるが、いづれにしても、大した萬ではない。しかし、黒は先著の効力確かであつて、釣合ひのよい局面である。

（第三圖）



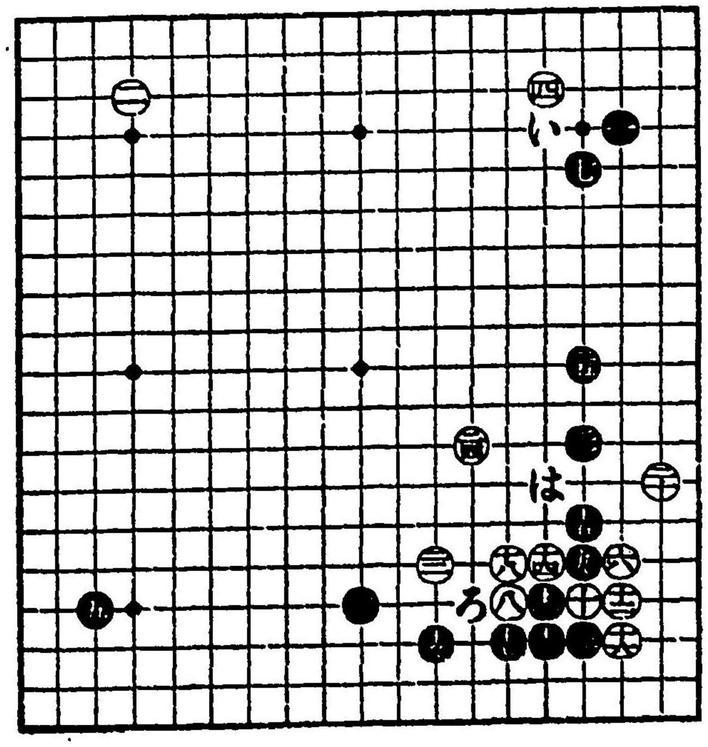
第四局

本局は、第三局における黒㊀の手よりの變化で、前局は、唯無事を好んで、無事無事と打つた譯であるが、第一圖のやうに、右上隅に㊀㊁とあつたり、又は㊃の白がなくて、㊁の手が「い」に締つてゐるやうな場合には、かく伸びる方が宜しい。

白㊅の手は普通であるが、しかし、趣向するとすれば、ここにいろいろと手段があるのである。けれども、それは定石通解の方に讓ることにする。

黒㊀は、據ない手であるが、かうなつて來た時に、右上隅に㊀㊁の石があるので、都合のよいことが分るであらう。尤も㊀㊁の黒石がなくて、㊀の處に白石があり、㊃の處に黒石のある場合には、黒は㊀の手で「ろ」に跳ね、白が「は」に掛けた時、㊁の處に掛けて打つやうな趣向も、亦た至極面白い。

（第一圖）

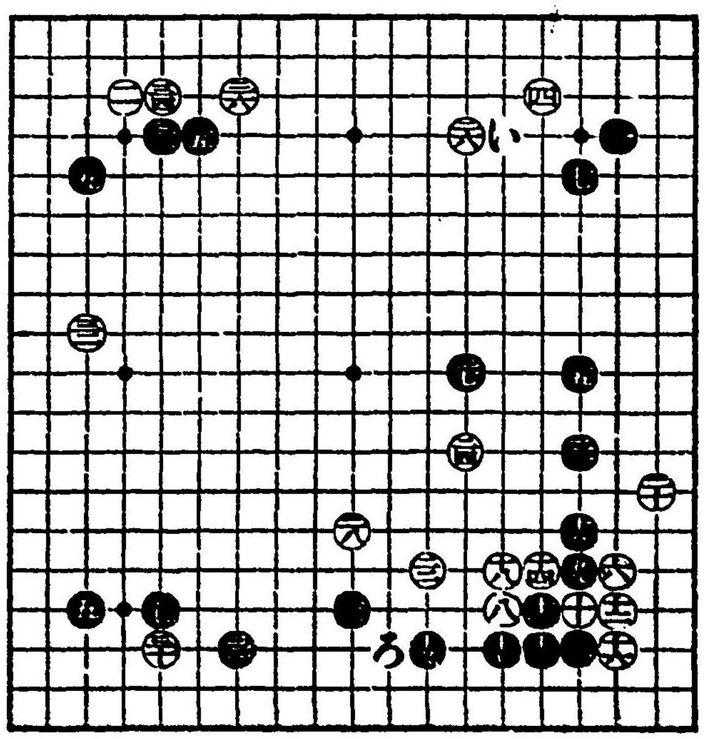


第二圖における白㊅の手は、この場合では善い手である。若し斯く打たずに他に打てば、黒より「い」に一著掛けるのが、黒の爲に非常に善いのだから、それで圖の如く㊅と打つて、幾分か右邊を狙つてゐる譯である。されば黒は、早く「い」に掛けたいのだけれども、その間がないのである。さてこれに對する黒㊀は善い手で、則ちこの手は、白の㊅に對する豫防かたがた、白を攻めてゐる譯である。

白㊅の手は、少し緩いやうだけれども、㊇以下㊉までの白を丈夫にしておいて、黒の㊀㊁と㊂との間に、幾分か隙があるから、それを狙つてゐる譯で、かういふ場合には、先づ自分を堅めてゐるのが宜しい。

黒㊂の手は、いはゆる大場で、㊃の手は、少し緩いやうだけれども、白より「ろ」に附けられる手が、別に仔細はないものの、味が惡くなるから、かく守つたのである。この時白は、他に打場がないから、㊄と大場を占めたのであるが、これに對して、黒が●と掛け、㊂と打つておいて、㊄と附けたのは、善い手順とはいはねばならぬ。

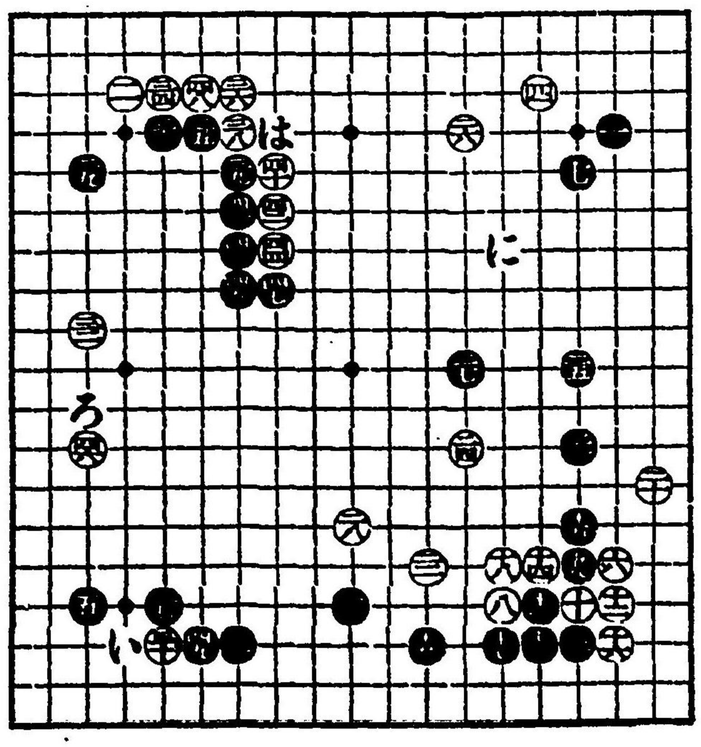
（第二圖）



第三圖に於ける白㊇の手は、『い』に伸びれば左下隅に活きるけれども、さうすると後手になつて、黒に『ろ』に詰められて面白くない。それゆゑ㊇の方に開きたいのであるが、唯㊇と開くのは氣がきかぬから、圖の如く㊇より㊇まで打つておいて、然る後㊇と開いたので、その手順は大に味ふべきである。

其の時黒が㊇と曲るのは、肝要の手で、白が若し手を拔けば、『は』に切つて打つといふ手がある。それゆゑ、白も亦㊇と繼いで豫防した譯である。かく黒が㊇と曲つておいて、㊇と一子を取切つたのは、手厚くて申分がない。これを要するに本局は、黒の厚い棊であるから、今度白は、『に』にでも打つてゆく手順であるが、黒の先著の效力は、やはり十分の棊勢である。

（第三圖）

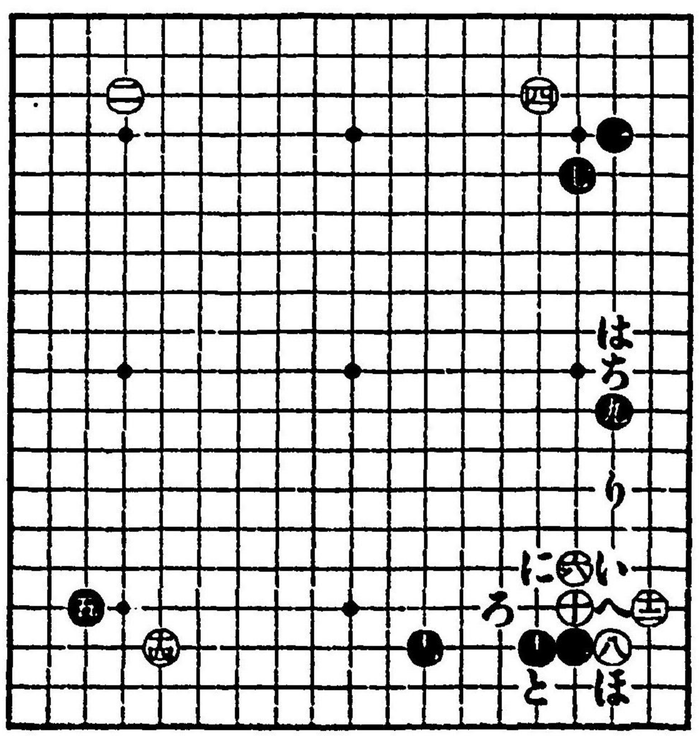


第五局

本局は、第一卷乃至前局における白㊇の手よりの變化であるが、かく第一圖のやうに㊇と高く掛るのは、黒に『い』に附けさせて、趣向しやうといふ意味である。そこで、黒は『い』に附けたところで、定石であるから決して惡いといふ譯ではないが、しかし、圖の如く㊇と尖んだ方が、手が狹くなるから、『い』に附けずに㊇と尖んだのである。言ひかふれば、かく㊇と尖んで、白の打つ手を見る方が、業に打てるからである。白㊇の手は、あたりまへの手であるが、この手で㊇の處に附けても善し、『ろ』に打つても宜しい。又或は『は』に打つて、黒に『い』若くは『に』に打たせるのも、亦敢て惡くはない。黒㊇の手は、場合に適したものである。普通はこの手で『ほ』に跳ね、白が『へ』に引いた時、『と』に掛繼いで打つのだけれども、此處では面白くない。ナゼならば、㊇の石があるので、白に『ち』に打たれると、恰度自分の打ちたい方に、敵から打たれることになるからである。

白㊇は本手であるが、しかし、圖の如く打つて面白くないといふ考への時は、㊇の處に夾み、黒が㊇と打つた時、『へ』に抑へる定石を用ゐることもある。黒㊇の手は、この場合は斯く打つて善いけれども、棊によつては、手を拔いて他に打つても差支へはないのである。白㊇の手は、此處では斯く打つより仕方がないけれども、しかし、黒の㊇の石が、若し『ち』に在る時は、この手で『ほ』に下り、黒が㊇と開いた時、『り』に詰めてゐるのが本手であると、心得ておかねばならぬ。けれども、此處では『ほ』に下つたところで、開くべき處がないから、圖の如く掛繼ぐより外はないのである。

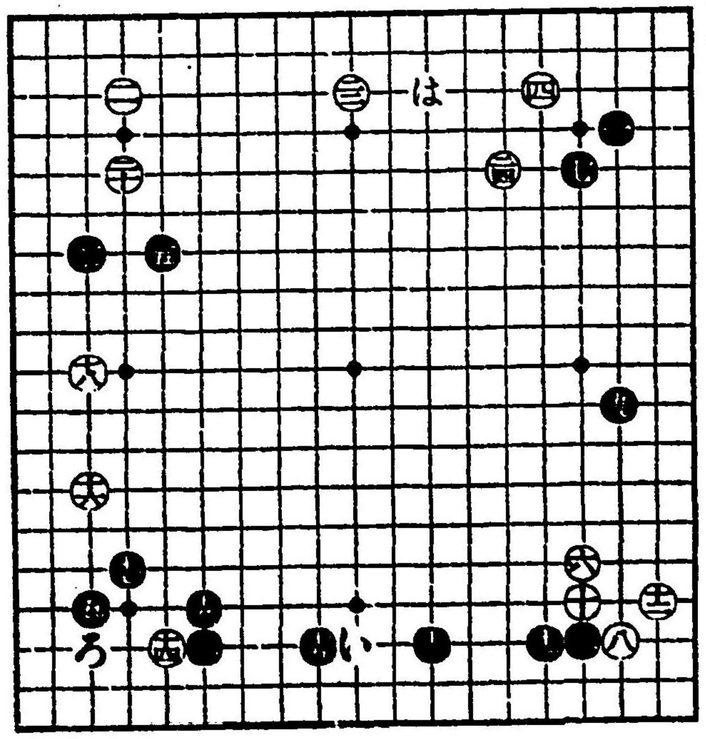
（第一圖）



第二圖における黒㊀の手は、大に宜しい。ナゼならば、㊁十㊂の石は、非常に嗣い石であつて、白より「い」に詰められるのは、餘程の打撃を受ける譯であるが、かく打つて置けば、恰も㊃の白を三間に夾んで、自己を用心した手になるからである。

白㊄より㊅までの趨向は、㊄の手で「ろ」に附けて打つても差支ないし、又他に打つても善いけれども、しかし、此處では下邊の黒が低いから、㊃の一子を棄てて打たうといふのである。普通㊆と掛けられて、㊇と取切られるのは、白の時も黒の時も、共に好ましくないけれども、この場合は、下邊の黒が如何にも低いので、かういふ場合には、黒が凝つてゐるから差支へない。

白㊈は、いはゆる大場である。しかし、この棄では「は」に打つて、㊉七と㊋との間の打込みを狙つてゐる手もある。黒㊌の手はここらで入るべきところであるし、白は㊍の手で、㊎にアブセる手もあるが、さすれば、キマリがついて仕舞つて、却つて面白くないから、かく形勢を張つて、黒の樣子を見た譯である。この時、黒が㊏と棄んだのは善い手で、今度此處に白よりカブセられては、たまらないことになる。

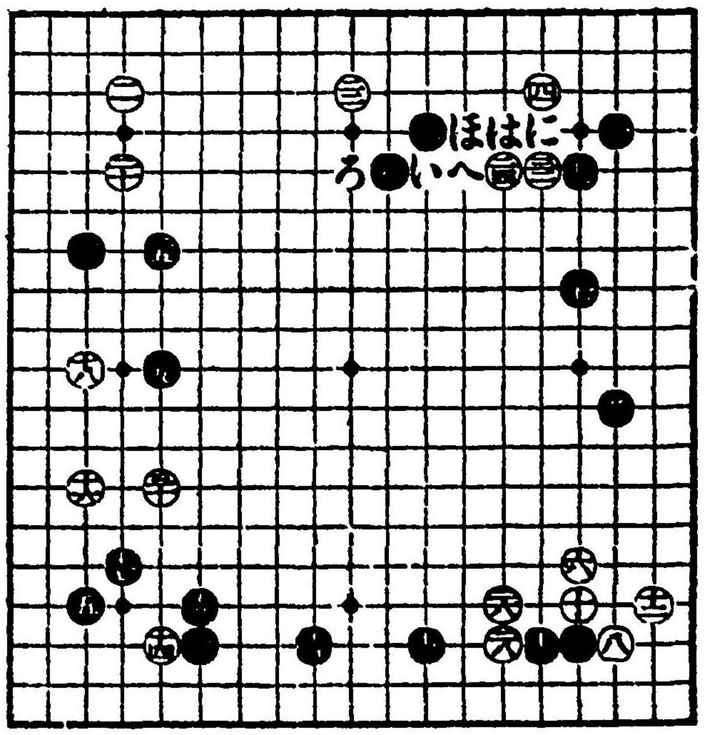


（第二圖）

第三圖における白㊄の手は、直に㊁の處に打つ手もあり、その他、いろいろと打つ手のあるところで、對局者の考へで、どうでも打てる場合であるが、圖の如く打つて、黒に㊅の處に一つ受けさせておくと、工合が善くなるから、それで試みた譯である。この時黒が、白の註文に乘らずに㊁と打つたのは、大に善い手である。ナゼならば、下邊は既に固まつてゐて、㊂㊃の二子は小さいから、かういふ石は棄てて打つのが善いのである。

黒㊆の手は、つまり㊂㊃の石を強くしておいて、㊇の處に攻込まうといふので、これに對する白㊈の飛びは、殆んどきまつてゐる手である。

そこで、黒㊉の手は、棄によつては「い」に打つ方が善いこともあるから、心得ておくべきである。さて、白が㊋の手で「ろ」に飛べば、黒は「は」に附け、白が「に」に抑ふれば㊌の處に切り、白が「ほ」に一子を抱ふれば「へ」に切つて、上の方から壓迫して仕舞ふつもりなのである。それゆゑ白は、止むを得ず㊍と用心した譯である。



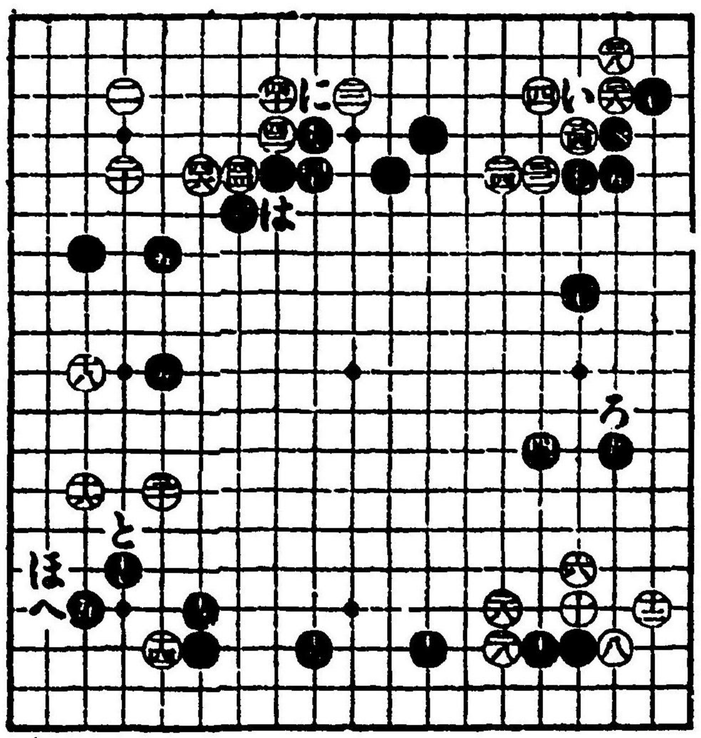
（第三圖）

第四圖における白㊇の手は、自己を守りながら、敵を攻める譯で、大きい處だから打つたのであるが、この手で㊀の處に打つ手もないではない。しかし、さうすると、黒は㊅の處に飛んで、白を攻むべきものである。又この手で、白が㊇の處に先きに附ければ、黒は「い」に跳込んで打つべきものであるから、心得ておかねばならぬ。

黒㊈の掛けは、先手を取つて㊀に用心したいからで、大に善い手である。若し㊀に打つておかぬと、白より「ろ」に附けて、地を減らして來る手があるのである。

黒㊉は善い手で、かういふ處は、かく跳ねるべきもので、●に繼ぐのは格別、「は」に伸びるといふことは、斷じて筋違ひであると心得ておかねばならぬ。白の㊇は捨ない手であるし、黒の●の繼ぎも善い手である。此處は、「に」の突出しもあつて、いろいろと味のある處だから、黒は斯く用心したもので、特に中央も大に厚くなる譯である。

そこで、今度は白の手番であるが、「ほ」に打つて黒が「へ」に抑へた時、「と」にでも突み附けて用心しないと、忽ちいけなくなるから、黒はやはり、先著の効力が十分であるといはねばならぬ。

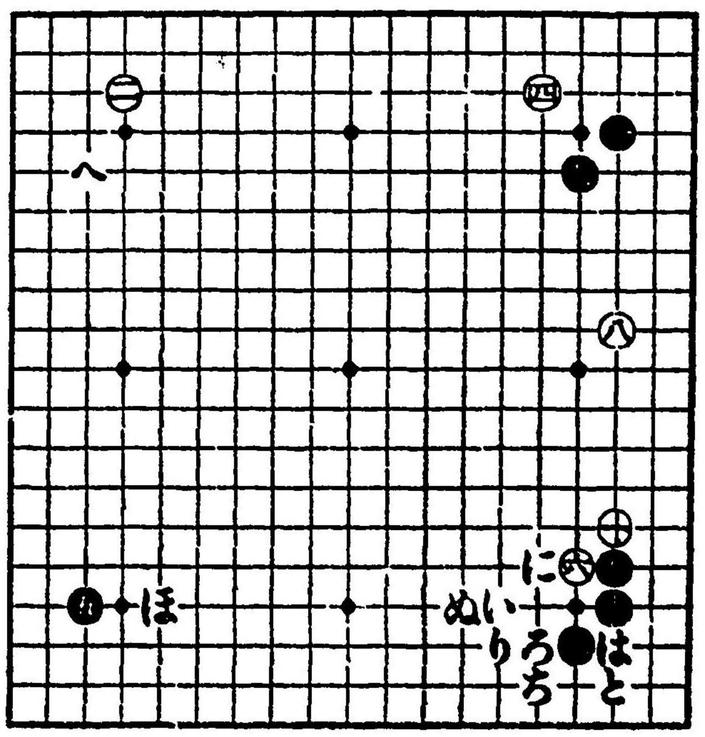


（第四圖）

第六局

本局は、第五局における白㊇の手よりの變化であるが、白はこの㊇の手で、前局にも說いた通り、第一圖の「い」に掛ける手もあり、「ろ」に附ける手もあり、又第五局のやうに、「は」に附けて打つ手もある。しかし、圖の如く目腦に開くのが、布石としては一番穩當で、つまり、黒の開かうといふ處に、白が開くのであるから、釣合ひが善いといふ譯である。

その時、黒が●と附けるのは肝要の手で、「に」に附ける手もあるが、先を持つては、圖の如く打つ方が確かである。ナゼ●の手が肝要であるかといふに、假りに、この手で「ほ」に繼るとか、或は「へ」に掛るとすれば、白は直に「は」に附けて來る。さすれば、黒は勢ひ「と」に跳ね、白が㊀の處に引いた時、黒は「ち」に掛繼ぐことになる。その時白に「り」に打たれると、㊅と㊇との間が、白のために非常に好都合となつて來るし、又白が「り」に打たぬとしても、假りに白が㊇の手で「は」に附け、後に㊇に開いたとしても、黒は「ぬ」の邊に打たねばならぬのに、それが白手になつてゐるのだから、どう打つたところで、旨い筈はないのである。だから、白が㊇と開けば、黒は見ずにも打つて善いくらゐに、●の手が肝要であることが分るであらう。



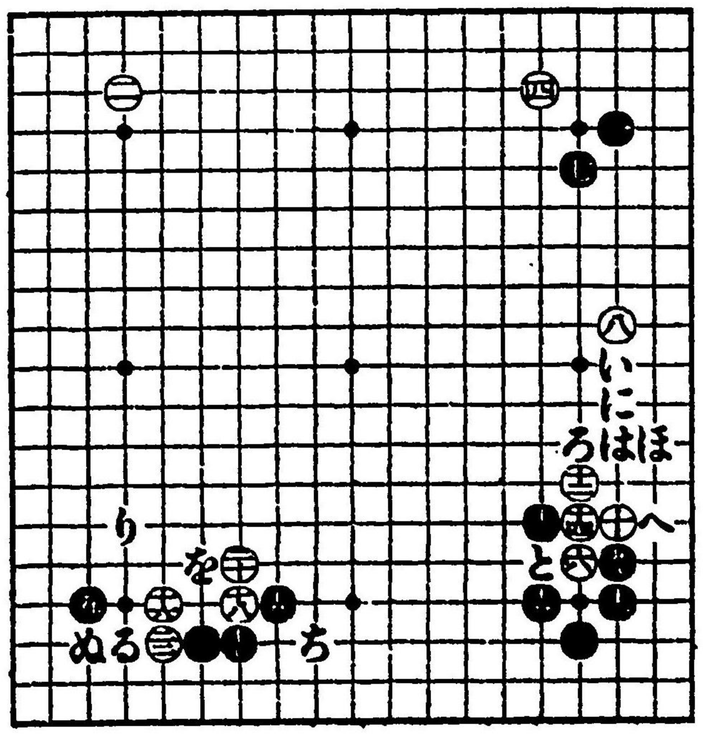
（第一圖）

第二圖における白㊀も亦善い手で、㊅の石が目脇に在る時は、かく打たねばならぬのである。しかし、㊅の手が「い」に在る場合には、㊀に堅く継ぐのが本手である。圖の如き場合に、若し㊀の手で㊁に継げば、黒はやはり㊂に受けてゐるが、後に黒より「ろ」に打込まれる手があつて、白は打方がないのである。ナゼならば、「は」に附ければ「に」に跳ねられ、又「ほ」に受ければ「へ」に跳ねられて、いづれも白の工合が惡いからである。

黒㊃は手順といふもので、白が若し㊄に継がずに「と」に押せば、黒は「へ」に跳ねて大に善いのである。黒㊃も亦善い手で、初學の中は、「と」に打つやうな者も時たま見受けるが、既に白に㊄と継がせた以上、㊃の石は無用であると思はねばならぬ。

白㊆の手は、「ち」の邊に割つて打つ手もあるが、それでは棊が狹くなるから、趣向をした手である。さりとて㊇に掛れば、黒に「ち」に夾まれるのは明かで、面白くないからである。その時、黒が㊈と打つのは激しい手である。この手で「ち」に打つ手もあるが、さすれば、白に「り」に桂馬に掛けられて、少し面白くない。つまり、かく㊈と打つのは、白より「り」に掛けたり、「ぬ」に附けさせまいといふ手で、白が若し㊆の手で「ぬ」に附けて來れば、黒は「る」に跳ね出す定石を用ゐて善いのである。白㊆も亦

（第二圖）



趣向の手で、則ち左右を打たうといふのである。普通は「を」に尖むのであるが、さすれば黒に「り」に打たれて、この場合面白くないからである。今㊇までの結果について、更にこれを解剖すると、最初白が㊆の手で㊇に掛つた時、黒が「ち」に夾めば申分のないのに、㊈に一間夾みをしたことになり、その時白が㊅に附け、黒が㊃に跳ねた時㊉と伸び、黒が㊃に突當つた時、㊆に伸びた手になつてゐるのである。これ則ち、白が最初㊇の處に掛らずに、㊆と掛つた所以である。

毎局三思を加へたる上、されば手を放たんと定むる時、五七言の二局ばかりも沈吟して、さて見そこなひはあらずやと思慮して、手を棊器にいるべし。吾眼に大に見ゆるは小さく、ちさく見ゆる所は、おほいなるものぞと、逆に考ふべし。大かた形の惡しき手に、善き手はなしと心得るべし。吾心によくもあらねど、まづ打試みんとおもふ手は、誓ひてうつへからず。

（幻庵因碩の「棊道諸兵法覚書」の一節）

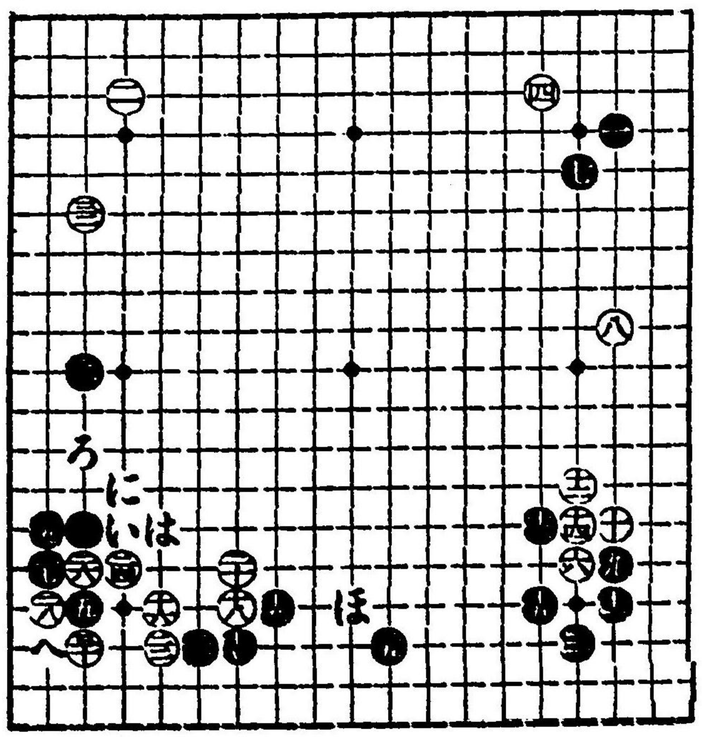
第三圖における黒㊀は、『い』に打つ手もあるが、然る時は、白は『ろ』に掛るのが宜しい。又白は『ろ』に掛らずに『は』に附け、黒が『に』に伸びた時、『ほ』に攻めるなども、亦一の趣向である。だから、黒は此等の手を嫌つて、圖の如く㊁と打つたのである。則ち黒が斯く㊁と打つたのは、白が㊀と覗いた時、手を抜いて㊁の方に打たうといふ趣向なのである。

そこで白は㊂の手で、『ほ』に打ちたいけれども、すぐには打てぬから、斯く打つたので、黒が若し㊃の手で㊄に繼げば、白は直に『ほ』に打つのである。されば、黒の㊃は善い手で、この㊅及び㊆の石は、極めて輕い石で、どうなつたところで打てるから、寧ろ手を抜く方が面白いのである。

さて白は、㊇㊈と打たずに、『ろ』に夾む手もあるが、さすれば、黒は㊉の處に下るし、又白が㊇の手で『に』に掛ければ、黒は『ろ』に飛んで、どれでも取れとシャレられるので、圖の如く打つたのである。尤も白は㊇の手で、『へ』に打つこともあるが、それは打つ人々の趣向であるから、いづれを用ゐても宜しいのである。

黒㊉の手は、この場合では宜しい。普通は白の切つた方を取るのが、定法であるけれども、この場合は、㊉㊊などと、白が凝つてゐる處だから、㊉の一子を棄てる方が、

（第三圖）

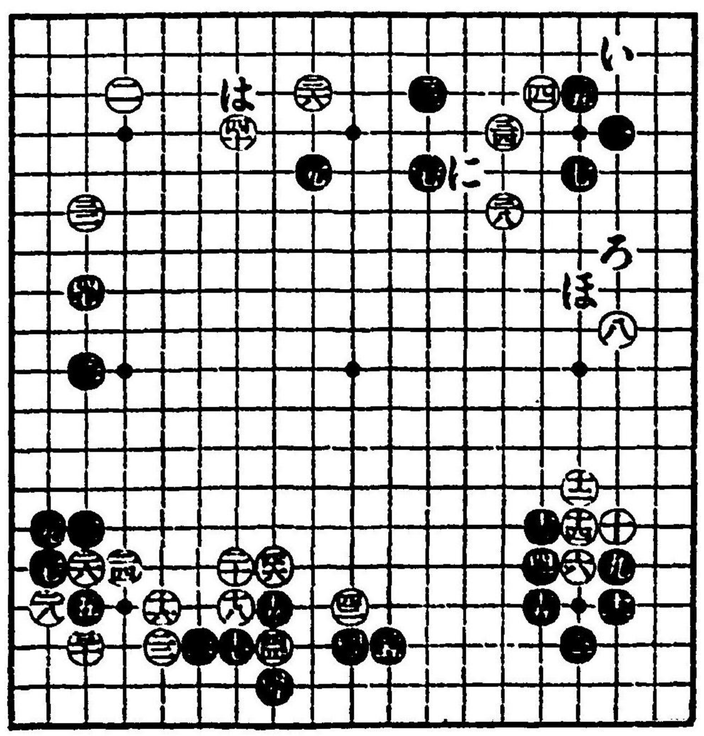


働きのある譯である。白㊂は、この場合唯一の大場で、他に善い處はない。

第四圖における黒㊀の尖み附けは、手堅く打つたのであるが、㊇の處に開いてゐるのも亦宜しい。しかし、さすれば白は『い』に桂馬し、黒が『ろ』に受けた時、『は』に詰めて打つ棊になると思はねばならぬ。要するに㊁の手は、白に㊇の手で『に』に尖ませ、而して㊇の處に開かうといふ趣向なのである。そこで、白も亦『に』に尖んだところで、右上隅の黒は丈夫であるから、黒に㊇の方に開かれると、㊂の石も亦逃げられて仕舞つて、結局虻蜂取らずになるので、圖の如く㊇と詰め、黒に㊁と飛ばせ、その拍子に㊈と飛んだので、働きのある譯である。黒㊉の手は、いろいろと手段のあるところだが、先を持つては、このくらゐで十分である。白㊂は止むを得ぬ手で、かくなつたところで、左上隅が悉く白の地といふ譯ではなく、まだいろいろと施すべき手段があるから、黒は㊉と打つて、㊂㊃の石を丈夫にして、幾分か白の地を薄くし、徐ろに手段を施さうといふのである。

黒㊃は、この場合善い手である。この手で『ほ』に出てゆくのも善いが、この場合は斯く打つて、白の手を見て打つ方が善い。といふのは、つまり右邊の白が廣いから、白がどう打つて、これを圍ふかを見やうといふのである。さて又白の㊃㊄㊅の手は、かく打つて黒の地を薄くし、黒の樣子を見やうといふので、つまり、黒の㊃に對して

（第四圖）



打つた譯である。黒㊁は、手堅くて善い手である。

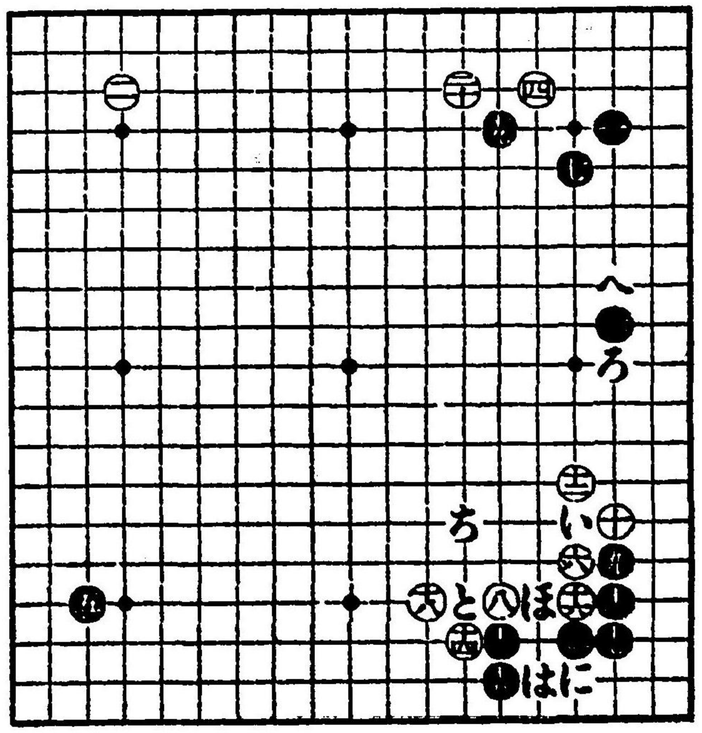
これより以後は打棊になるので、一一說明は出來ぬが、全局の形勢上、黒は決して惡くはないのである。

第七局

本局は、第五局及び第六局における、白㊅の手よりの變化であるが、第一圖の黒の●は、この場合における普通の手である。白が若し㊆の手で「い」に堅く繼げば、黒は㊇の手で●に掛け、白が㊈に飛んだ時「ろ」に開くのである。さうすると、白「は」黒「に」となつた時分に、白の㊅㊉及び「い」といふものが、堅過ぎるから、黒の方が善いけれども、しかし、圖の如く白が㊆と掛繼いだ時分に、㊇と打たずに●に掛け、白㊈の時㊇に開いたとすれば、その時白「は」黒「に」と打つたことになるから、黒は「ろ」に打てるのに、一路控へた譯になるし、白の㊅㊉㊆が、働いた形になつてゐるばかりでなく、後に黒より「ほ」に尖み附ける時分に又工合が悪いことがある。それゆゑ、白が㊆と掛繼いだ時分には、圖の如く㊇と附けるのが本手である。

特に、㊆の白が「い」に在る時分に、黒が●と打てば、白はあながち㊅と當て㊄と繼ぐとは限らないで、㊅の手で「へ」に開き、黒が「と」に切つた時「ち」に打つて、㊆の一子を棄てて打つ趣向もあるのである。けれども、圖の如く㊆と掛繼いだ時分に、黒に「と」に切られるのは、たとひ「ち」に打つて、一子を棄ててもマズイから、㊅㊄と打たねばならぬので、則ち黒の●●と打つのが、手順である所以である。

（第一圖）

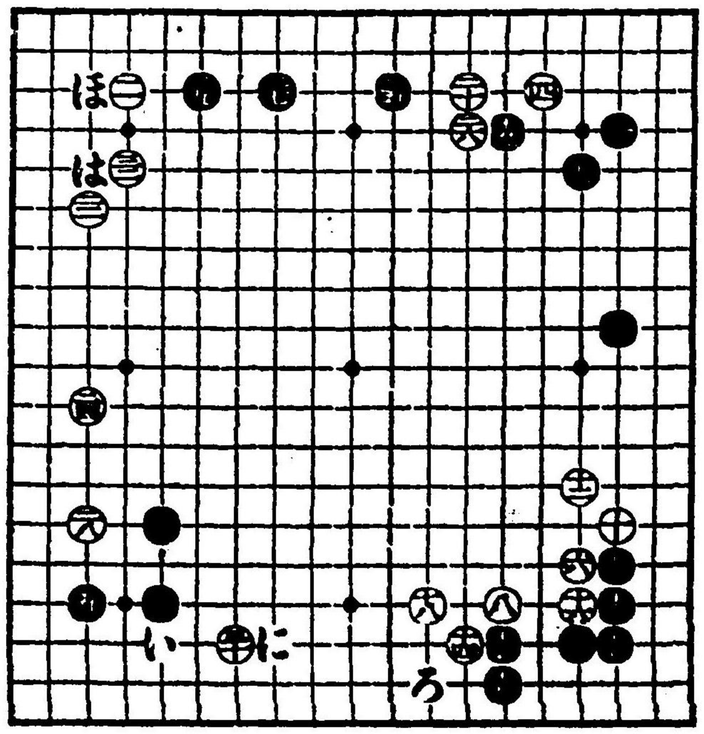


第二圖における白の㊇の手は、普通「い」に掛かるのであるが、この場合では、圖の如く繼るのが宜しい。それは、「ろ」の處がいはゆる「据明き」で、地にならぬ處であるから、白が「い」に掛かれば、黒に「は」に掛かられて面白くないからである。則ちこの場合は、自から㊇と繼り、黒にも㊇と繼らせて、㊇の大場を打つ方が、棄が廣くなる譯である。

黒の●●は善い手であるし、白の㊅も場合に適してゐる、一見白は㊅の手で、㊄の方に打ちさうな處だが、前にも述べた通り、「ろ」の處が「据明き」であるから、圖の如く打つ方が、正味の譯である。黒●も亦善い手で、普通ならば「に」に打つ處であるけれども、この棄では、「据明き」の一件があるから、ツマラナイのである。白㊈の手は、「据明き」の點から見れば、値打のない手であるが、この場合は、黒を攻める意味において、先手であるから善いのである。これに對して、黒の㊇と應じたのは、いはゆる本手といふもので、かく打つて置けば、左下隅の黒は大丈夫である。

さて白㊇の手は、既にアラカタ布石が濟んだので、今急に黒を攻める處もなし、地を取る處もないので、黒より「ほ」にでも附けられて、地を減らされては堪らぬから、その用心をした譯である。

（第二圖）



第三圖における黒㊀の手は、自己を守り、敵を攻める手で、白に大模様の出來ないやうにするには、かういふ處から、著著進むのが善いのである。白㊁は普通の受手。黒㊂の手は、普通㊃に尖み附ける處であるが、この碁では、㊄と打ち、㊅と白の眼を虧いて、且つ守り且つ攻めやうといふので、特に打つたのであるから、素りに用ゐては宜しくない。つまりこの三手は、この碁では、手順が善いといふに過ぎない。

これに對して、白㊆は善い手である。これは、模様を取りながら、遙かに㊇以下の白を助けてゐる譯である。黒㊈は、緩いやうである所れども、やはり白を攻めてゐるのだから、ヘタな處を打つよりは、かく受けてゐる方が宜しい。

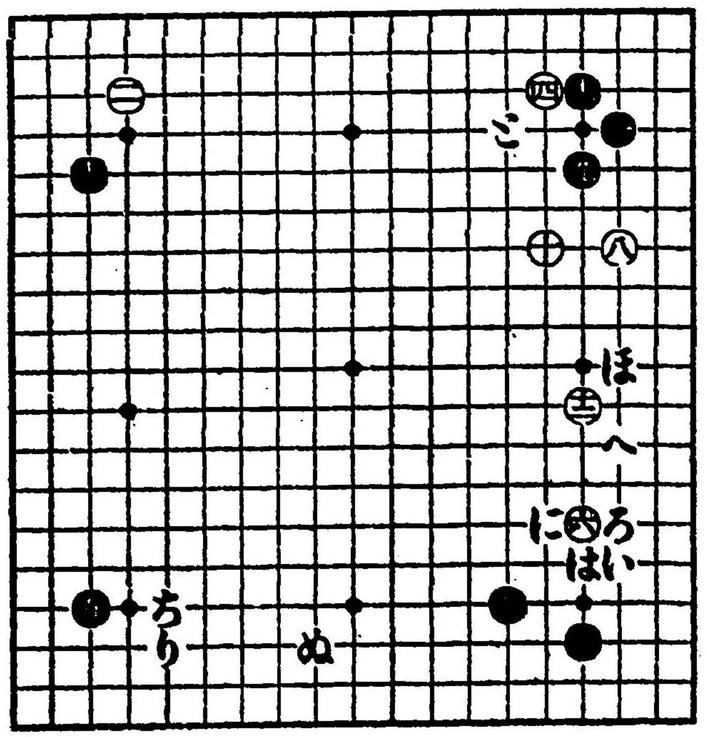
白の㊉㊊の手は、つまり、おひおひ「い」の抑へでも打てば、地が出來るやうにして、黒に「ろ」にでも飛びたがらせるやうにして「は」に出で、黒が「に」に抑ふれば、「ほ」に附けて、隅を攻めやうといふ意味である。

第四圖における黒㊀は大に善い手で、前にも說いた通り、白から「い」に出られる手を、此處で防いでゐる譯である。若し白が㊁の手で㊂に抑ふれば、黒は㊃の處に出で、白が「ろ」に跳ねれば、「は」に切つて二子を棄て、先手に隅を活きるのである。ゆゑに、白も亦㊄㊅と圖の如く打つた譯で、止むを得ぬ次第である。

白㊆の手は、種種の釣合上から打つた手であるが、その時黒が、㊇と尖んだのは善い手である。黒はこの手で、「に」に飛込みたい處だけれども、さうすると、左邊の地を消すことが出來ないからである。それに、碁が善いのであるから、かく手堅く中央に臨んで居れば、たとひ白が「ほ」に抑へたにしても、「へ」にでも飛んで徐徐と消してゆけば、左右とも段段消えてゆくので、黒の方が宜しい譯で、やはり、白の㊈に對して、拶挨をした道理である。この後黒が、「と」に出て㊉㊊の二子を取らうとするのは、一方の石に障つて來るから、宜しくないと知らねばならぬ。又白が㊋の手で、「へ」に桂馬にでも打つて來るとすれば、その時こそ、黒は「に」に飛込むべき好時機である。かやうに、「据明き」といふものは、地にするのに苦心せねばならぬもので、最初白が㊁の手で「ち」に掛からなかつたのも、黒が㊃の手で「り」に開かなかつたのも、ここに至つてますます明瞭になるであらう。斯る消息を、よく味ふやうになれば、イヤでも碁は上達するもので、無事味、無考へで打つたのでは、幾百局打つたところで、決して上達する氣遣ひはないものと、心得ておかねばならぬ。

第八局

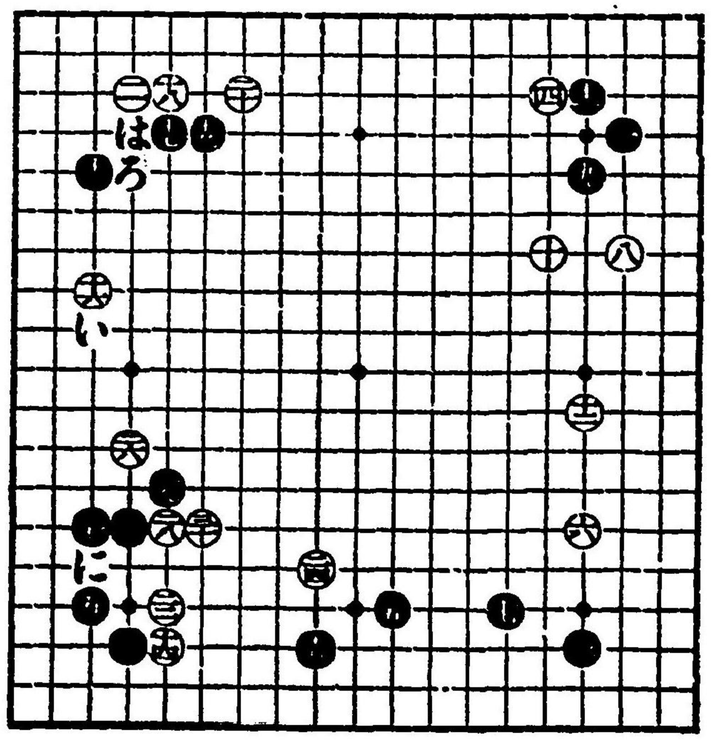
本局は、前七局における白㊅の手よりの變化であるが、第一圖のやうに、二間に高く掛るのも、亦一の趣向である。白が斯く高く掛つて來た時は、方面は違ふけれども、黒は㊀と受けるのが普通である。尤も、㊁の尖みの在る場合ならば、㊂の手で「い」に打ち、白が「ろ」に抑へた時「は」に押し、白が「に」に伸びた時、「ほ」に夾んで打つやうな趣向もよし、又前に説いたことのあるやうに、㊃の手で直に「へ」に攻めるのもよいが、㊄の尖みのない場合には、圖の如く桂馬に受けて、白の趣向を待つて打つのが宜しい。白㊆の手は、他の隅を打つてゐても善いけれども、併しこれは、右邊を白く圍つて打たうといふ策に出たのである。この時、黒が㊇と尖むのは穩當の手で、白㊉は、その趣向を追つた譯である。黒㊈の手は、「と」に掛けて打つ手もあるが、黒を持つては、圖の如く尖み附けてゐて差支ない。白㊊の手は、今度黒に「へ」の邊に打込まれてはタマラヌから、此處を廣く取つて、黒の趣向を待つのである。黒㊋の手は、「ち」に締るのも善いが、この場では、白が「り」に掛つて來れば、「ぬ」に夾むのが恰度善い處だから、圖の如く掛るのが宜しい。



（第一圖）

白㊌の手は、中中ムブカシイ處であるが、單に「い」に夾んでゐるなども亦善い手である。黒㊍の手は、㊁㊂の方からの開きにもなるし、㊌の白を三間に夾んだことにもなるから、善い手である。白㊎は、㊌の方が打ちにくいので、かく夾んで、黒の趣向を待たうといふ心である。黒㊏及び㊐は、この場合、白が「ろ」に附けても、「は」に跳ね出す手があるから、單に㊁に尖み附けてゐても善いが、しかし上邊の工合があるので、圖の如く掛けておく方が、白に手段をせられないのである。

白㊅に至つては、「に」に附けて戰ひたいのだが、それには、㊎の石が遠過ぎて無理であるから、圖の如く打つて、黒を攻めながら、自己を守つたのである。黒㊑は確かな手である。しかし、㊅の方に伸びて打つのも、この場合惡くはない。白の㊅㊆は、㊌以下の石の凌ぎに打つたまでである。

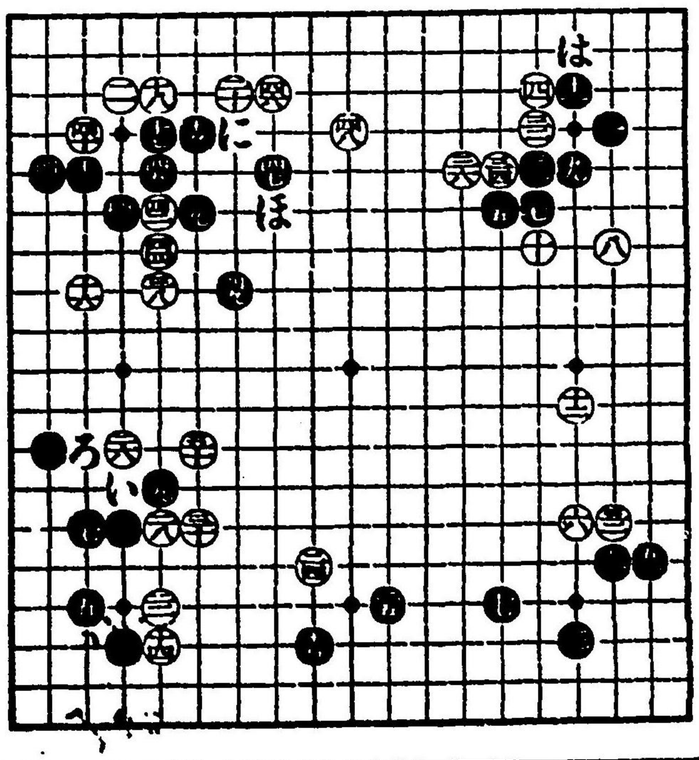


（第二圖）

黒㊀は大に善い手で、「い」に繼ぐのも惡くはないが、この棊では面白くない。ナゼならば、「い」に繼げば、白に「ろ」に下られるからである。この時、白の㊂㊃は善い手順で、この邊で打たないと、打つ時機を失ふことになる。さて黒は㊄の手で、「は」に下るやうな手もあるが、それでは、右邊の㊇㊉の方に響かぬから、かく打つたのである。白は㊅の手で、「に」に押したい處だが、㊆㊈の石が弱くて無理であるから、先づ自から備へたのである。この時、黒㊉は善い手である。この手で、「に」に押してゆく手もあるが、斯く打つてゐる方が、白が困るのである。白の㊉より㊇までは、善い手順で、定石と言つても善い程である。黒㊉の手は、「ほ」に飛ぶ方が形のやうだけれども、この場合は、圖の如く打つ方が宜しい。白㊇黒㊉白㊇は、止むを得ぬ手順で、黒の㊄㊅は、いはゆる大場である。

本局は、至つて無事の棊であるから、無論黒は先著の効力十分である。

（第二圖）



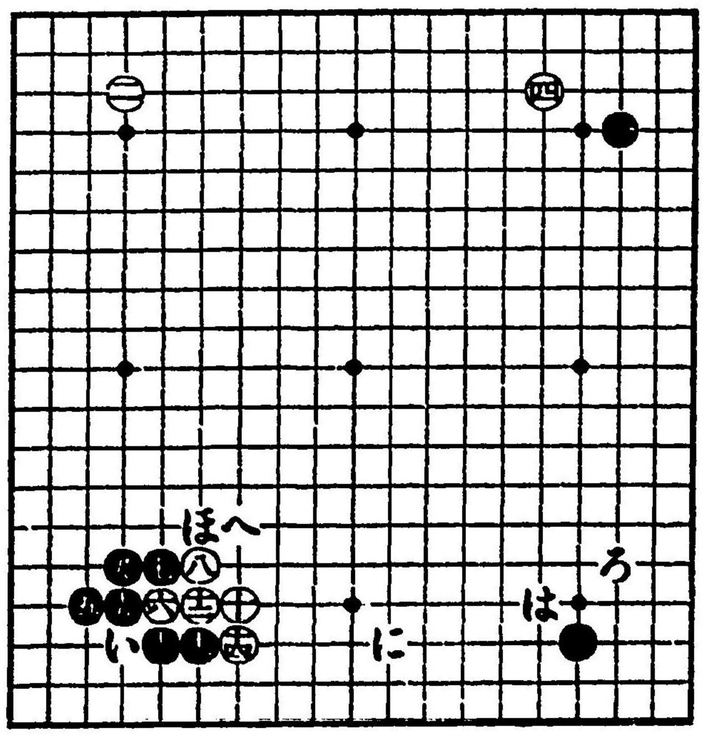
第九局

本局は、前八局における、白㊅の手よりの變化であるが、白が第一圖のやうに㊅と掛るのは、黒に㊀の處に附けさせて㊁の處に抑へ、黒が「へ」に引いた時㊉に掛繼ぐといふ、普通の定石を濟まして、「ろ」に掛るとか、或は㊉に掛繼ぐ手で、直に「ろ」に掛り、黒が「は」に尖めば㊉に掛繼ぐし、若し又黒が「は」に尖まずに、㊂の處に切つて來れば、「は」に掛けて打つとか、少し變つた棊を打たうといふやうな場合に、趣向で打つ手である。

そこで、黒㊄の手は、㊀に附けたところで何でもないが、全然手を拔いて他に打つのは、割合ひの惡いといふことを知らねばならぬ。しかし、かく㊄と附けたのは、幾分か白の趣向を挫いた譯である。

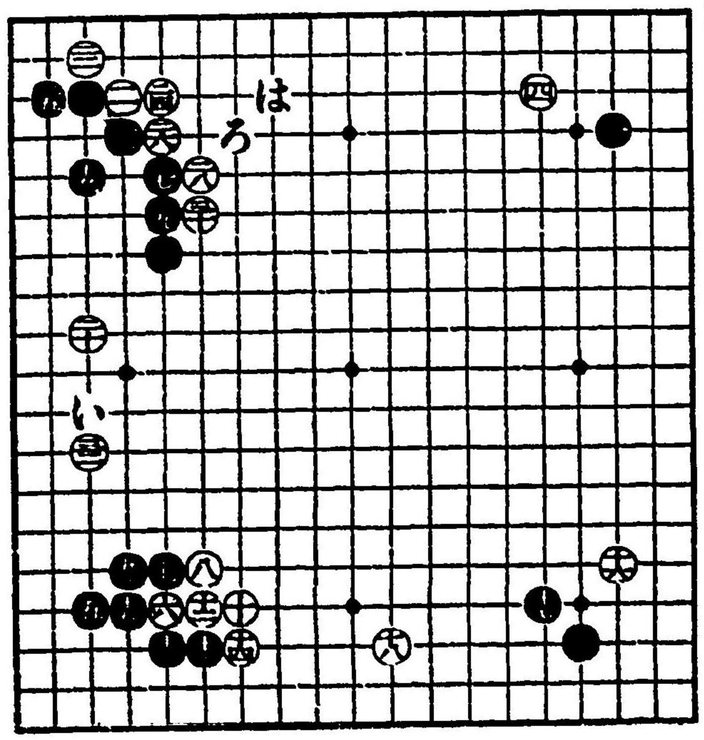
黒㊄は善い手であるが、しかし、「に」に白石の在るやうな時は、㊀の處に附けるのが善い。ナゼならば、黒が㊁に覗けば、白に㊀の處に打たれて、取り込まれる恐れがあるからである。白㊂は普通の手で、若し㊀の處に打てば、黒に「ほ」に跳ねられ、㊂に繼げば、黒に「へ」に伸びきつて打たれて、普通白が惡いことになつてゐる。さて又黒㊇は肝要の手で、一見「い」に引きさうな處だが、それは緩くて惡いと心得ておかねばならぬ。

（第一圖）



第二圖における白㊱は、善い手順といふもので、かく白が掛れば、黒は㊲の方に開くことが出來なくなる。ナゼならば、毎毎說いた通り、白より㊳の處に掛けられて低くなり、黒の不利になるからで、この場合、黒は㊴と尖むのが、穩當で宜しい。白㊲の手は、定石といつても善いくらゐの手で、つまり、白は㊱と掛つても、かく㊲と開けるから、㊱と打つのが、善い手順であることも、隨つて分るであらう。

黒㊷より㊸までは、先手を取つて、「い」に一著詰めたいといふ意であるが、この時白は㊹の手で、「ろ」若くは「は」に打つのが定石であるけれども、黒より「い」に詰められるのを嫌つて、圖の如く先手を取り、㊺に開きたいといふ趣向で、㊻と曲つた譯で、かく互に「さうはさせじ」と、趣向を挫くあたりが、碁の意氣地といふもので、又趣味のあるところである。



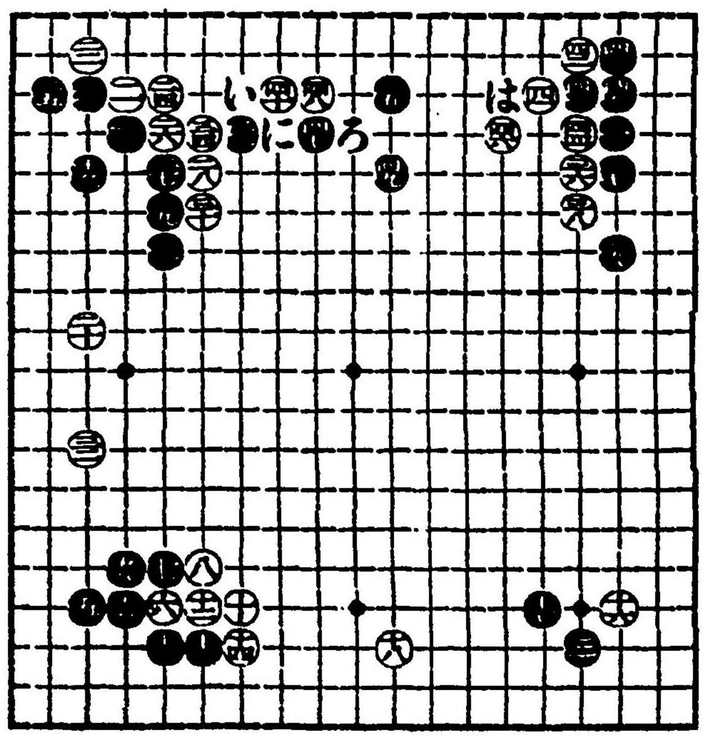
（第二圖）

第三圖のやうに、黒が先づ㊷と覗いておいて、然る後㊸と夾んだのは、善い手順といふもので、これやがて「い」に下つて、白を攻めやうといふのである。然るに、若しこの㊸の手を打たずに、直に「い」に下れば、白に㊸の處か、若くは「ろ」に打たれて、面白くないのである。白㊹は、どうせ㊺の處に打たねばならぬから、かく掛けて先手を取つたのである。

黒㊻の手は、㊸の一子を逃げねばならぬところだから、一著かく打つて逃げるのが、手順といふものである。ナゼならば、若し、單に逃げ出せば、白より㊼に附けられる機會が來れば、マズイのみならず、損だからである。白㊽は止むを得ぬ手で、若し㊾にでも冠せると、黒に「は」に附けられて、取る譯にはゆかぬからである。どうせ㊸の黒は、一手で逃げきることは出來ぬから、先づ自己を守り、追ひおひに攻めるのが宜しい。

さて又黒㊿の時、白が(51)と打つのは善い手で、若し「に」の方に出れば、黒に(52)に抑へられてマズイから、㊸の一子を取らうとするのは宜しくない。黒(53)は本形といふもので、かく打つておけば、この黒は取られるやうなことはない。

かくて白は、黒をセル心で打進めば、細い碁になろであらう。



（第三圖）

第十局

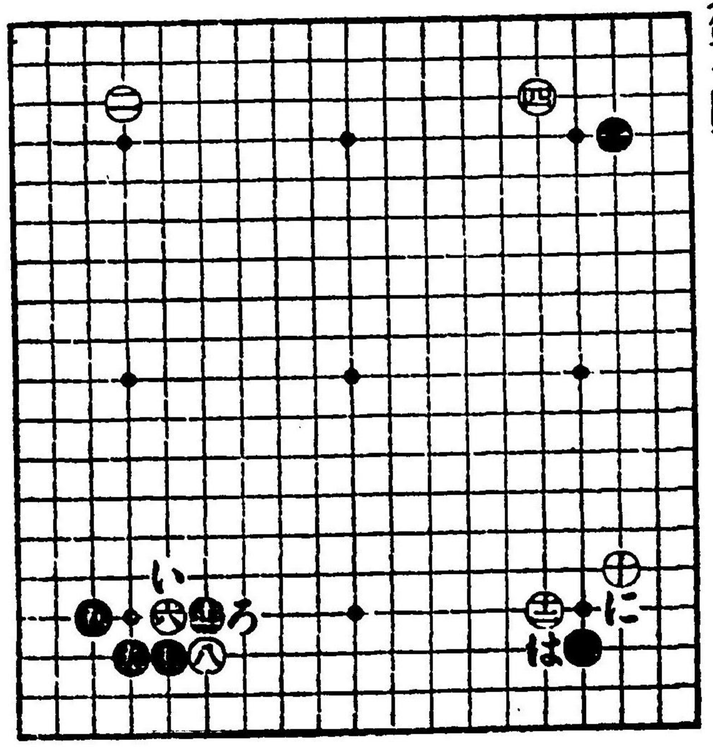
本局は、第九局における、黒㊀の手よりの變化であるが、黒は第一圖のやうに下の方に附けて、白が㊅と抑へた時、㊆と引いて打つても當り前で、惡いことはないのみか、黒としては、前局のやうに「い」に附けるよりは、この方が穩かである。

白㊉の手は、「ろ」に掛繼ぐのが普通で、それでも惡いことはないが、白であるから、一趣向を立てたので、則ち黒に圖の如く㊁と切らして、打たうといふのである。總じて、白でも持つた時は、かういふ氣分が最も必要で、かの「圍碁秘妙」の著者として有名な、林元美などは、時々この手を用ゐたことがある。

この時黒㊁は善い手で、かく切つておくのは、決して黒が惡くないことになつてゐる。しかし、この手で㊂の處に尖んで、白に「ろ」に掛繼がせたところで、普通であつて、惡いことはなく、打てるけれども、今は變化を示すのである。

さて白㊉の手は、一の趣向であるが、若し㊂の石が「は」に在る場合に、㊉の手で「に」に掛つて、黒に㊁と切られるなどは、この上もない惡い手で、趣向でも何でもないのみか、これで負けになるくらゐのものである。ナゼならば、白は圖の如く、㊂と掛けて打つことが出來ぬからである。白㊂の手は、㊉の趣向を繼續した譯で、則ち一方に損をしても、此處を低くするから、それで差引がつく道理である。

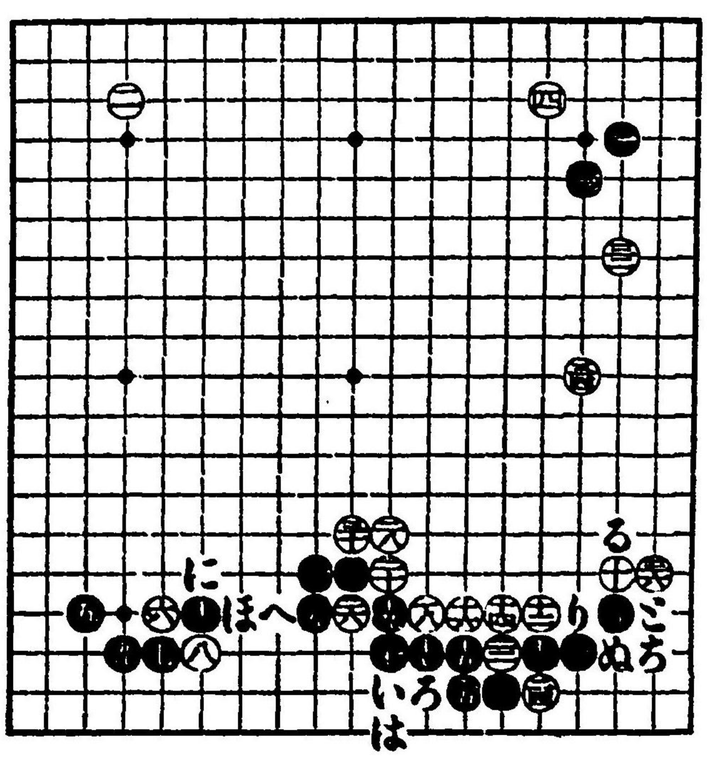
（第一圖）



第二圖における白㊉までは、自然の手順であるが、この時、黒が㊁と跳ねるのは、善い手である。斯る場合には、圖の如く㊁に跳ねる手と、㊂の處に尖み附ける手と、二通りの定石があるけれども、左下隅に㊅㊆と白があつて、㊁と切つて在る場合には、圖の如く㊁に跳ねてゐないと少し危險のことがある。則ち黒が㊂の處に尖み附けると、白は先づ㊂に出で、黒㊃の時㊄の處に切り、黒が㊅の處に伸びた時「い」に下り、黒が「ろ」に打てば「は」に下り、黒に㊆に繼がせて㊇の處に押し、黒が㊈に伸びた時「に」に跳ね、黒が「ほ」に伸びた時「へ」に割込んで、黒の二子又は三子を、捨にするやうな妙手が、白の方にあるのである。

白㊉より㊅までは善い手順である。㊅に至つては「と」に跳ねて、黒が「ち」に抑へた時「り」に當て、黒に「ぬ」に繼がせて、他に打つ手もあるが、黒に「る」に附けられる手などが殘つてゐて、却つてイヤであるから、圖の如く下つて打つ方が宜しい。

（第二圖）

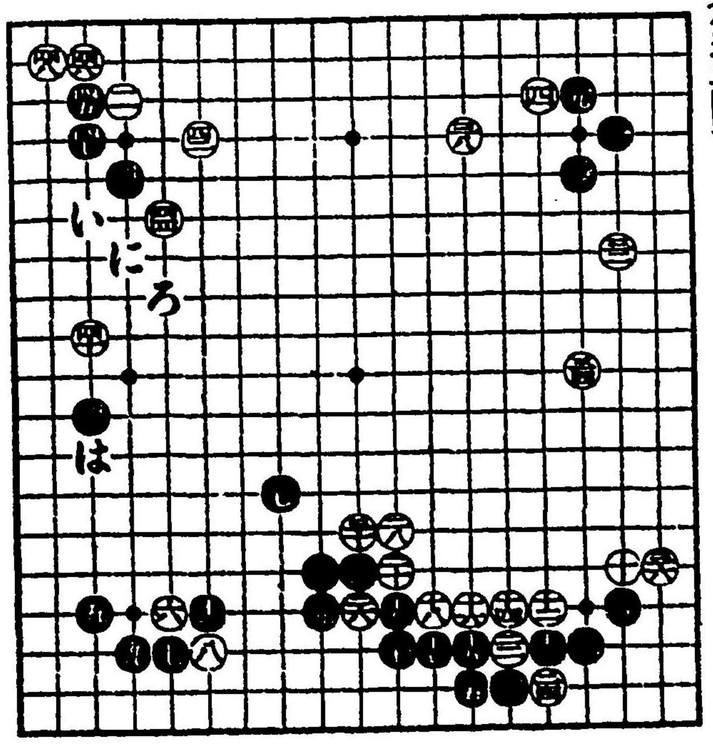


第三圖における黑㊀の手は、一見小さいやうであるが、その實非常に大きい處で、双方とも爭つて打つべき、いはゆる天王山である。若し黑が他に打つて、白より㊁の處に打たれることになれば、黑は一手を要する處であるから、全局の形勢が一變して仕舞ふ。

白㊄黑㊅は、共に據ない手であるし、白㊇も、この場合では善い手である。普通は、この手で「い」に締るべきところであるが、さうすると、下邊の黑が非常に大きくなるから、かく打つたのである。

この時黑が㊈と打つておいて、㊉と詰めたのは、善い手順である。普通は㊉の手で「ろ」に打つべき處であるが、それでは、白に「は」に開かれて、白が恰度善いことになるから、かく詰めるのが宜しい。

この時白が㊉と打つたのも、亦善い手である。黑㊈に至つては、「に」に飛ぶ手もあるが、この場合では、圖の如く附けて、㊀と引く方が、分り易くて宜しい。



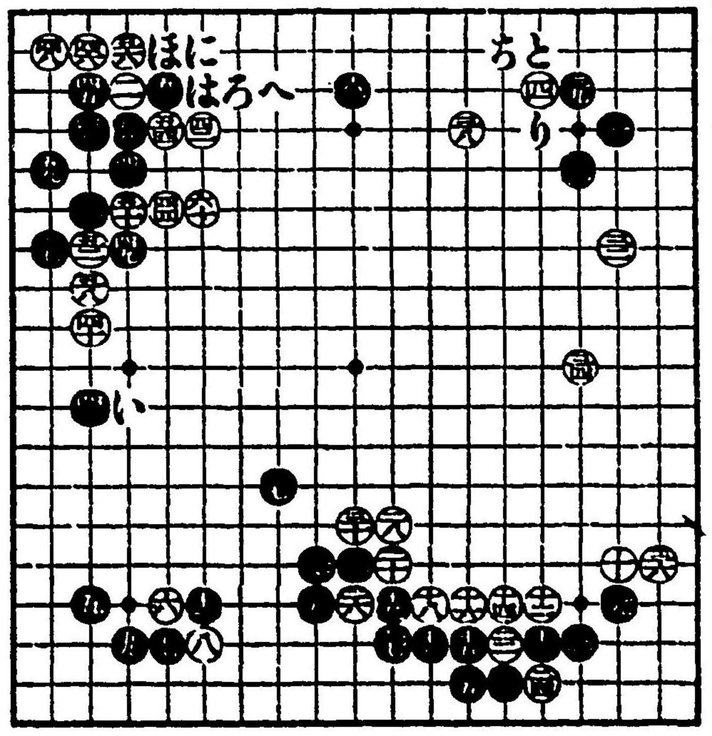
（第三圖）

第四圖における黑㊀の手は、㊁の處に打つ手もあるが、しかし、この樣では先手を取つて㊀の方に打たうといふ趣向であるからから、かく打つたのである。

白㊂の手は、「い」に附けて見るのも善いであらうが、しかし、これは㊀の石に對して、㊄㊅の石を利用して、後に何とか手段を施さうといふツモリで、わざと打たずに置くのである。

白㊃の並びは、餘儀ない次第であるが、黑㊁の打込みは、その處を得て宜しい。ナゼならば、白が若し他に打てば「ろ」に打ち、白が「は」に出た時「に」に跳ね、白に「ほ」に取らせて、捌くことが出來るし、又白が㊁の石に向つて、直に「へ」に詰めてゃも來れば、黑は先づ「と」に跳ね、白が「ち」に抑へた時「り」に跳ね、㊁の一子を棄てるやうにして、右邊における白の大模樣の方に、段々に及ぼして行くやうに打つのである。

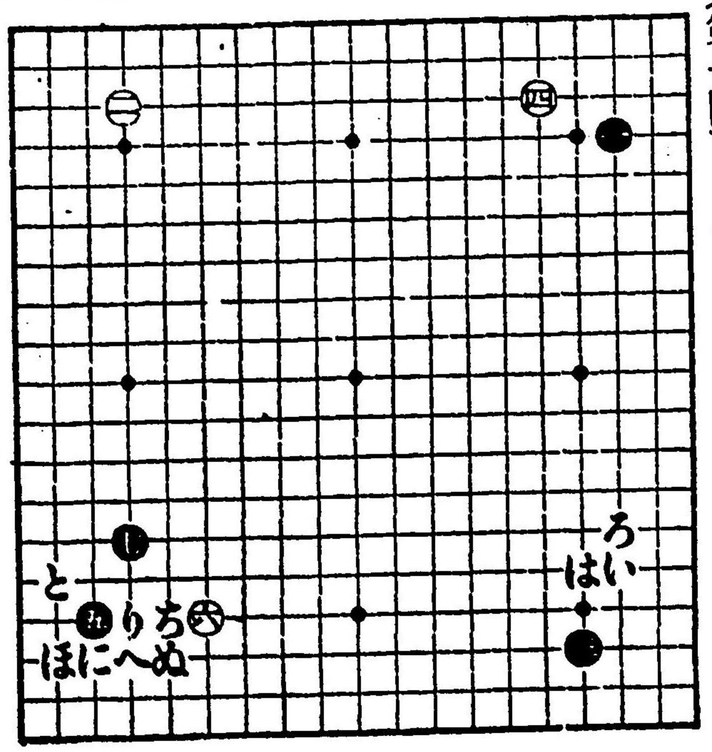
これを要するに、本局は、黑の地は確定してゐるのに、白の地は、まだキマリがついてゐないから、黑はヤハリ、先著の效力十分である。



（第四圖）

第十一局

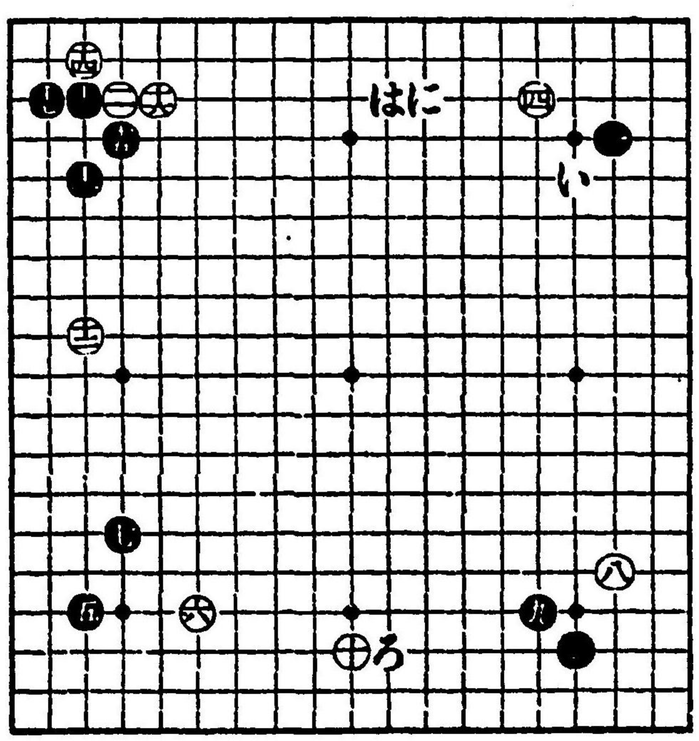
本局は、第九局及び第十局における、白㊅の手よりの變化であるが、第一圖のやうに、白が㊅と二間に高く掛るのは、黒に一隅も締まらせまいといふ趣向の時に打つ手である。ナゼならば、黒が㊃と受けずに、「い」「ろ」若くは「は」に締れば、白は直に「に」に附けて打つので、さうなれば、この隅は白が非常に得で、黒は餘程のことがなければ、その損を取り返すことが出來ぬ。則ち白が「に」に附けた時、黒が「ほ」に跳ねれば白に「へ」に引かれるので、黒は「と」に掛け繼がねばならぬが、さうなつた時に、白の㊅の手が「ち」にあれば、五分五分の定石になるけれども、㊅と離れてゐるだけ、黒が損であつて、單にその損だけならば、大したことはないけれども、とにかく先手で白に利益を占められるのであるから、それだけ「先」の効力が減じた道理で、隨つて、勝利も覺束なくなつて來る。さりとて黒が手を拔けば、白に「へ」に引かれても餘程損だし、又「り」に跳ねられても宜くない。故に、黒は勢ひ「へ」に跳ねなければならぬが、さうすると、白に「り」に切られる定石となつて、この定石は、黒の損に定つてゐる。これ白に㊅と掛られた場合には、黒は㊃と受けてゐるのが一番宜しい譯で、則ち白は、「ぬ」に掛るべき處であるのに、㊅と損をして來たのであるから、黒の悪い道理はないのである。



（第一圖）

第二圖における白㊅の手は、黒の締りを妨げたのと、黒が㊉の方に開いて來れば、毎毎說く通り、㊇の處に掛けて善いから、つまり、締りと開きと兩方を妨げた譯で、これより善い手はないのである。この時黒は、㊃の手で「い」に尖んでも悪くはないが、しかし、圖の如く㊃と尖んでおけば、白は勢ひ㊉の方に打たなければならぬから、先づ白の手をチャンと定めて、然る後他に打つのが順序である。

白㊉は止むを得ぬ手で、二子も置かせた棊ならば、「ろ」まで開かないと、棊が遲れてしまふけれども、「先」の棊では無理である。黒㊀は、この場合における大場であるし、白㊉も、他に急の處もないから、かく夾んで、黒に地を取らせぬやうに妨げ、且攻めてゐる道理で、則ち普通の著手である。さて又、黒が㊀と附けたのは、此處を早く治まらうといふ手だが、この場合、黒には種種の趣向がある。則ち「は」若くは「に」に夾むなども、悪くはないが、しかし、圖の如く治まる方が、打易いのである。

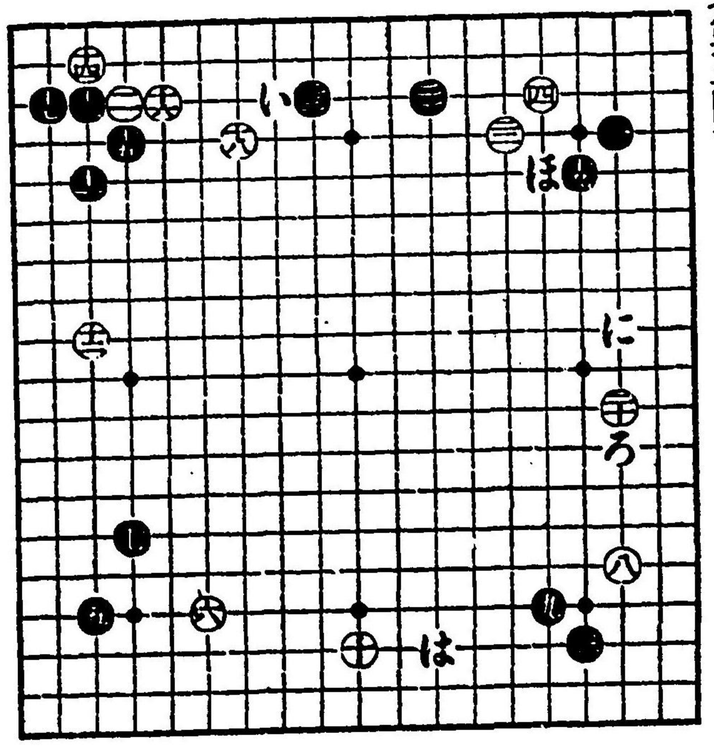


（第二圖）

第三圖における白㊇の手は、茱によつては、「い」に打つこともあるが、しかし、一方に㊀と三間夾みの在る場合には、圖の如く打つ方が、一方の應援にもなるし、地を取るにも都合が善いのである。

この時、黒が㊁と尖むのは確かな手で、つまり、上邊と右邊と、兩方に打ちたい場合には、かく尖むのが善いのである。これに對して白㊂は、この場合至當の手である。尤も㊃に開くやうな時もあるが。しかし、この場合は、黒に「ろ」に夾まれるのが、目に見えてゐるから、圖の如く打つのが宜しいのである。

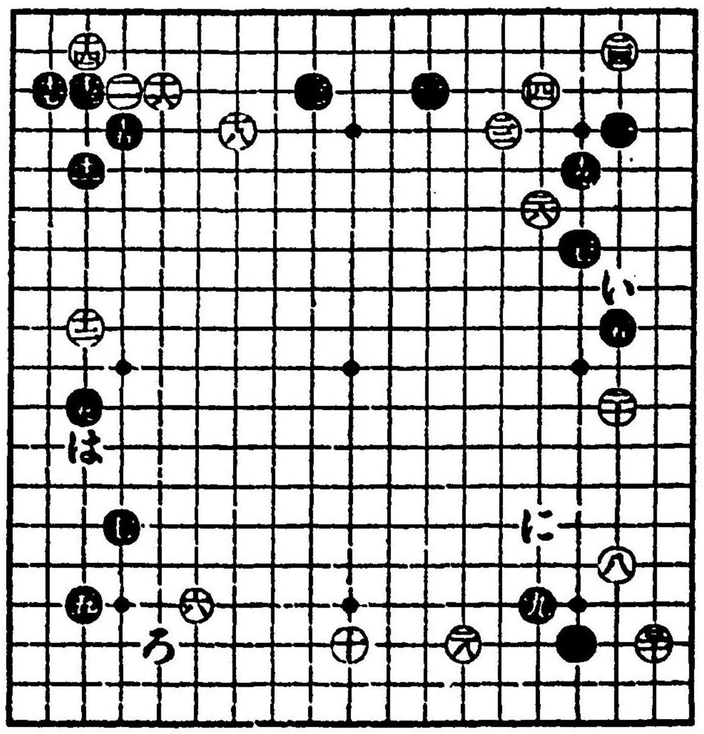
黒㊄は、「は」に詰める手や、「に」に詰める手もあるが、これは見合ひの處であるから、圖の如く、「割打ち」の方が宜しい。白㊅は、「ほ」に附ける手もあるが、「ほ」に附けたところで、黒はヤハリ㊆に開くのであるし、黒に㊇の處に掛けられるのは、何處を打つても惡いのであるから、かく尖んでゐる方が宜しい。



（第三圖）

第四圖における白㊈の手は、「い」に打つのも趣向であるが、これは、この隅を消して㊅の處に打たうといふッモリなのである。これに對して黒㊉の手は、「い」に控へて打つのが本手であるけれども、かく一杯に詰めたのは、㊅と㊂との間を狙つてゐる譯で、それには、㊆まで進まぬと、白に響かないのである。白㊇は、㊀㊁㊃の間が狭いから、かく掛けて、黒に㊄と受けさせ、㊇の大場を打たうといふ譯で、則ち先づ得をして、㊅㊂の間を用心したことになるのである。

黒㊉の手は、㊅の白が「ろ」に在る場合には、非常に大きい處だけども、圖の如き場合には、白より「は」に來たところで、さほどコタへないから、隨つて、黒が打つても大した處ではないが、他に格別の處もないので、かく打つたのである。白㊂の手は、「に」に打つても善いが、要するに、㊅と㊂との間が薄弱であるから、それを防いで、アタリを固める手段である。



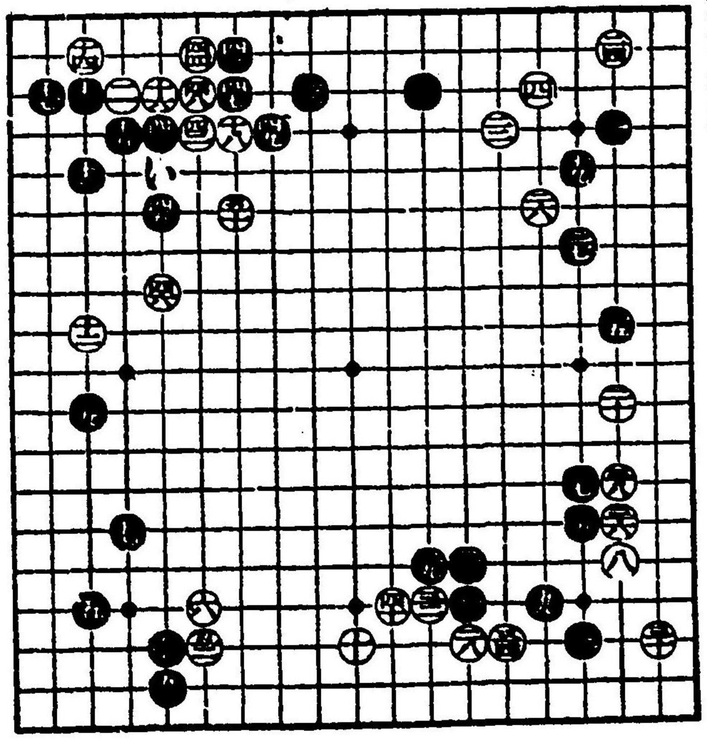
（第四圖）

第五圖における、黒㊀より㊁㊂までは、一見損のやうであるが、治まりが善いから、これで宜しい。黒㊃も、この場合善い手である。白㊄の手は、基によつては㊅に飛ぶこともあるが、幾分か損であるし、本手ではない。さて又、黒が㊆と覗いて、㊇と飛んだのは手順といふもので、つまり、白に「い」に跳ねられるのは、圖の如くなつてからは、餘程惡いことになるので、かく打つのが働きのある譯である。

白㊈は、止むを得ぬ手であるが、黒が㊉㊊と用心して、㊋㊌と手止まりの大場を打つたのは、善い手順といはねばならぬ。

要するに、本局は、地の點からいへば、黒の方が多いけれども、今後白は、㊍㊎以下の黒を盲く攻めて打ちさへすれば、細かい碁になるであらう。

（第五圖）



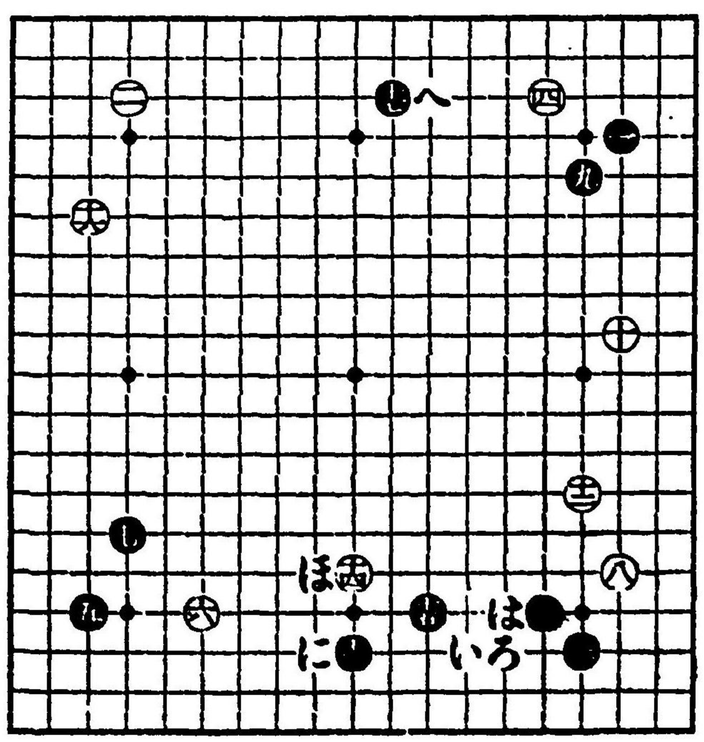
第十一局

本局は、第十一局における、黒㊄の手よりの變化であるが、これに對する白㊉の手は、此處でいろいろと趣向のある處である。則ち第一圖に於ける「い」に夾んで、黒が㊀に尖んだ時、㊁の處に開いてゐる手もあれば、又「ろ」に夾んで、黒が同じく㊂に尖めば、「は」に押すといふ趣向もあり、又この方面には構はずに、單に㊃の方に締まる手もある。しかし、一方に㊄の尖みの在る場合には圖の如く㊉と開くのが、非常に間合がよいのであるから、黒に㊁の方を讓つた譯である。

そこで黒㊁の手は、㊅と㊆との交換がなければ、「に」まで進むことが出來て、白が掛りやうに困る處であるが、かく一路控へさせたのは、幾分か㊅と打つた効能がある譯である。白㊇の手は、幾分か㊅の石を助けながら、黒の樣子を見やうといふ手であるが、これに對して、黒が㊈と受けたのは普通である。しかし、基が最初の中でなければ、「ほ」に附けて戰ふ手もないではないが、要するに、黒としては、餘り得にならぬものである。

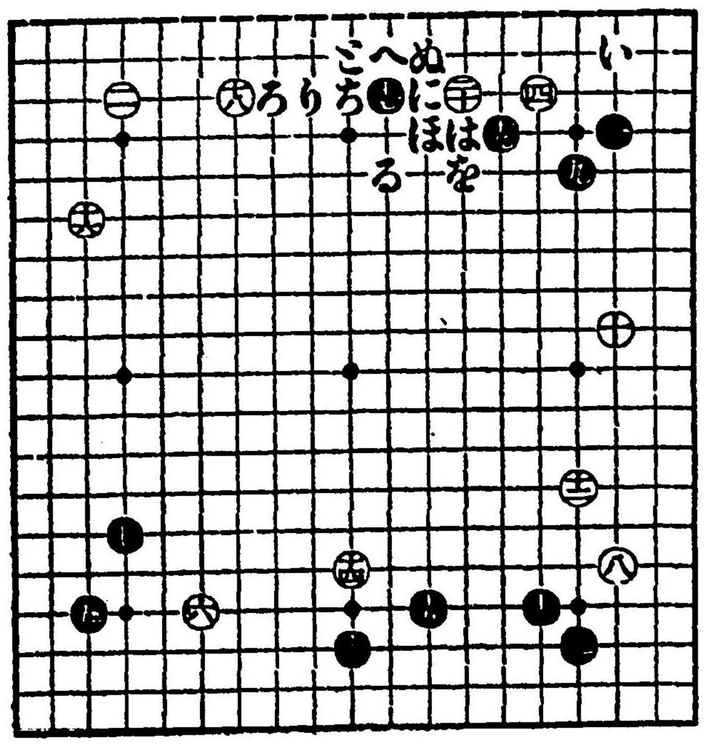
さて白は、一方が略片付いたから、轉じて㊉と締つたので、いはゆる大場である。この時黒㊁の手は、「へ」に夾んでもよいけれども、㊀㊅と白の締まりの在る場合には、圖の如く三間に夾む方が、開くのに工合がよいのである。

（第一圖）



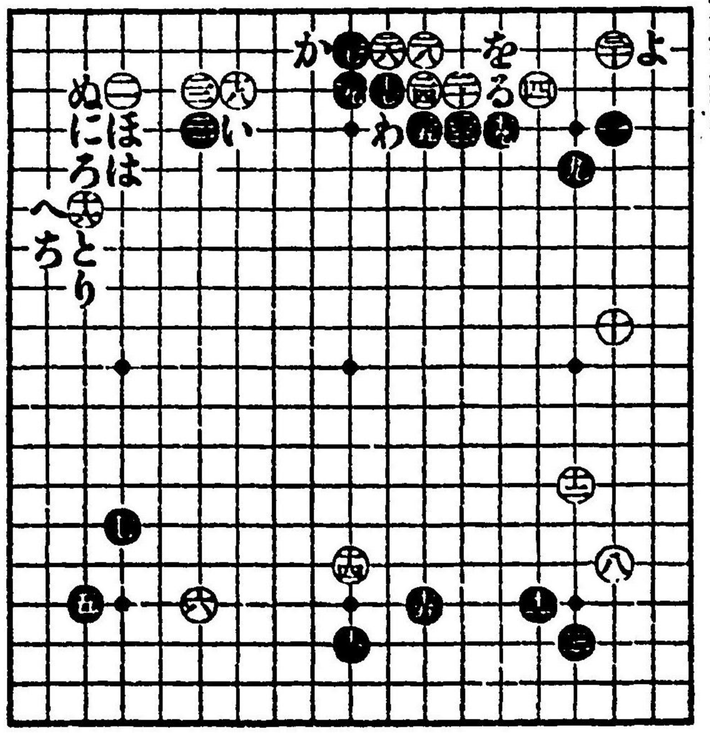
そこで白は㊅の手で、何處に打つたらよいかといふに、第二圖における「い」に桂馬してもよいが、その時は、黒は「ろ」に開いてゐて宜しい。然るに、白が圖の如く㊅と開いたのは、黒の「ろ」に開いて來るのを防ぐと同時に、自己の地域を廣めたのである。白は㊅の手で、「ろ」まで開きたい處だが、さうすると、黒に㊆と掛けられ、白㊇黒「は」白「に」黒「ほ」白「へ」となつた時、黒に「と」に二段に跳ねられ、その時白が「ち」に切れば、黒に「り」に跳ね出されてマズイし、さりとて、「と」に跳ねられた時「ぬ」に繼げば、黒に「ち」に繼がれて、「ろ」に打つた㊅の石が、黒の堅い處に寄り過ぎて、無理になつて仕舞ふのである。又更に一路を進めて、「り」に詰めたらどうかといふに、さすれば、同じく黒に㊆と掛けられ、白はヤハリ㊇に飛ばねばならぬが、その時黒に「る」に飛ばれて、打ちニクイことになる。則ち白は、「を」にでも飛び出すくらゐのものであるが、それでは、「り」に詰めた手が、面白くないことになつて仕舞ふ。かういふ譯だから、圖の如く控へて打つたのである。

（第二圖）



そこで、黒が第三圖のやうに㊇と打つのは、いはゆる手順といふもので、假りに、白が㊇の手で「い」に押せば、黒は㊈に尖んで、右上隅に先手を取り、一轉して「ろ」に附けて、左上隅を荒して仕舞ふのである。則ち黒が「ろ」に附ければ、白は「は」に抑へ、黒「に」白「ほ」黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」黒「ぬ」といふやうな結果になる。それゆゑ白は、㊇と默つて受けてゐるのである。しかし、白が斯く受けたところで、黒よりは、後に「に」に打込む筋があるし、㊉と押して往つた時分に、㊇と打つてあるのと、打つてないのとは、違ふことがあるので、かく一つは打つておくのが手順である。

さて又黒の㊉の手は、普通は「る」に出てから打つのが手順であるが、一方に㊇とあるので、單に㊉と打つたのである。則ち普通は、黒「る」白「を」黒㊉白㊈黒㊉白㊅黒㊈となつた時、白は㊅に切つて黒に「わ」に繼がせ、然る後㊅と繼ぐ定石となる處で、ナゼ先きに黒が「る」に出るのかといふと、㊅の手で、白に「か」に㊉の一子を抱へさせまいといふ意味である。然るに、圖の如く㊇と㊈と交換してある時は、左上隅には、まだ打込みの筋が殘つてゐるし、白が若し「か」に㊉の一子を抱ふれば、黒は㊅に切らずに、其の時「る」に出るので、白は凝り形となつてマズクなるのである。されば、白㊅は止むを得ぬ次第で、圖の如く㊉～なつた時分に、「る」と「を」との交換がないので、黒が「よ」に附けた場合に、殆んど一著の相違が生（第三圖）



れて來る。かういふ處は、勝敗にも關係するのであるから、よくよく心得ておかねばならぬ。

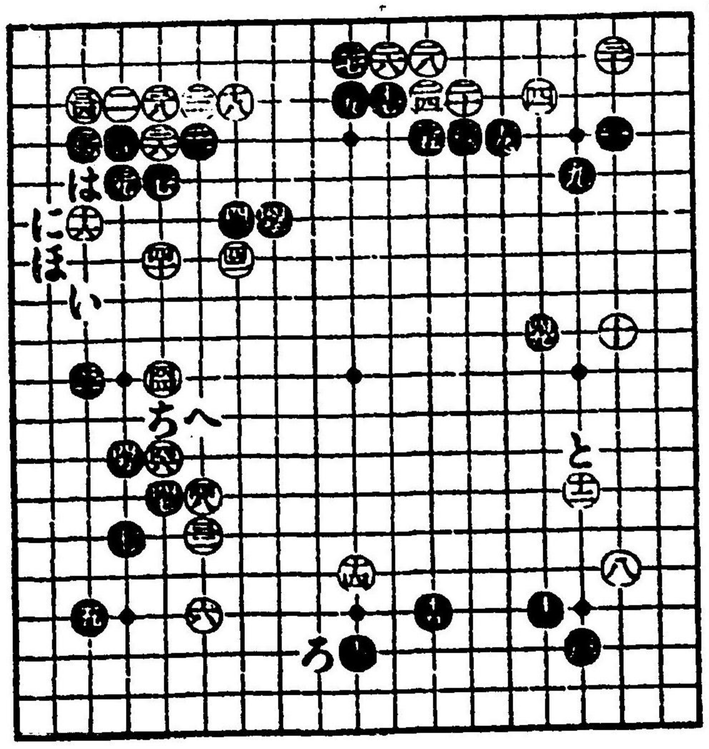
第四圖における黒㊀は、大場であるから打つたのであるが、白の㊁に至つては、いろいろと趣向のある處である。則ち●と打込まれるのを防がうとならば、「い」に打つてゐるのだし、又「ろ」に附けて、㊅㊆の石を治める手もないではないが、餘り面白くはない。それに、黒より㊂の處に打たれると、この方面が、非常に打ちニククなるから、圖の如く打つたので、かういふ處は、何目の利益といふことは、もとより計算する譯にゆかぬが、本局のやうな碁では、とにかく非常に大きい處である。

黒㊃の打込みは、もとより豫期を實行した譯であるが、白㊄の手は、㊃の處に抑へ、黒が「は」に伸びた時㊅に抑へ、黒が「に」に跳ねた時、「ほ」に二段跳ねに打つ手もある。けれども、㊆と㊇との間が薄弱であるので、その方に手を殘しておくのが、却つて面白いから、圖の如く打つたのである。

白㊈は形といふもので、此處は、黒より出られると工合が惡いから、斯く出口を塞いだのである。則ち、假りに、この手で㊉の方に飛ぶとすれば、黒より「へ」に曳り出して來られるからである。黒㊉は大に善い手であるが、若し局勢が黒に不利である場合には、黒は㊉の手で「と」に附けて打つのである。かくて後に黒が「ち」に跳ね込めば、白は「へ」に抑へるものと心得ておかねばならぬ。

本局も亦、黒の厚い碁であるから、黒はヤハリ先着の効力十分である。

（第四圖）



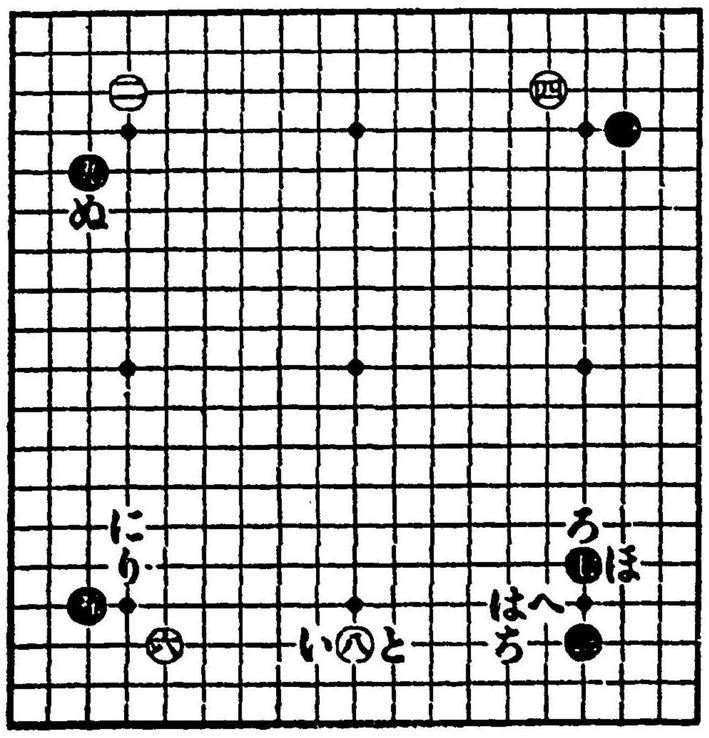
第十三局

本局は、第一卷及び前十二局における、白㊅の手よりの變化で、白が第一圖のやうに㊅と掛つた時は、黒は普通㊆の手で、「い」に三間に夾むのであるが、白は夾まれるのを豫想して打つたのである。無論夾まれるのは、多少惡いけれども、白はどうせ最初より、善い手ばかり打ちやうがないから、いろいろと趣向を變へて、言はば稗を蒔いて見るのである。

そこで、黒が豫想通り「い」に夾んで來れば、白は「ろ」に掛り、黒が「は」に受けた時、「に」にでも掛けて打たうといふ趣向なので、「い」に夾まれた時分に「ほ」に掛つて、黒に「へ」に尖まれるのは面白くない。されば、黒は、白の趣向を避けるために、先づ㊆と圖の如く締つて、今度は「い」に夾まうといふのである。白㊅の手は、黒に夾ませまいといふ手で、㊇と黒の在る場合には、よく打出す手である。尤も、㊆の石が「ほ」に在る場合には、一路進んで「と」に打つのが宜しい。それは、後に「ち」に詰める手が、大場になるからである。

さて又、黒㊆の手は、「り」に尖んで惡くはないが、㊅と㊈との間が四間であるから、白に「ぬ」の方に締られて、別段黒より急に旨い手もないので、先づ大場に打つた譯である。

（第一圖）

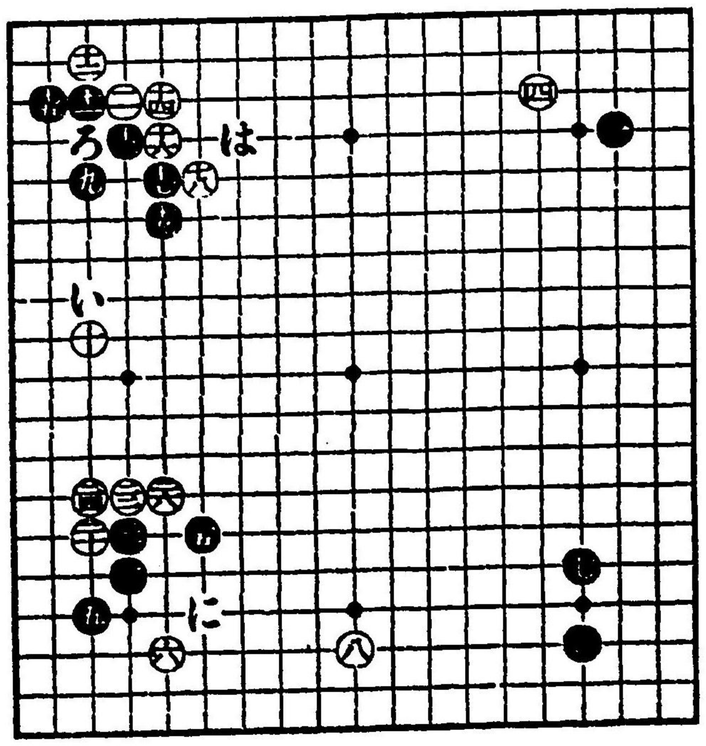


第二圖における白十の手は、この場合別にやりやうもないから、かく夾んだのであるが、一路進んで、「い」に二間に夾んでも惡くはない。その時黒が㊀と附けたのは、白より「ろ」に尖み附けられないやうに、此處を早く治まつて、㊁の方に開かうといふのである。

そこで白㊄の手は、普通「は」に受けるのであるが、さすれば、黒が㊂に開くのが見えてゐるから、先手を取つて、十に夾まうといふ趣向で、圖の如く㊄㊅と打つたのである。すべて碁といふものは、この氣合が必要で、この氣合がなければ死物である。

黒㊁の手は、普通㊂に尖むべき處であるが、さすれば、白に㊁に押されて、十と十との間には、到底打込むことの出來ない碁になる。到底この間に打込むことが出來ぬ以上は、成るべく其の間を狹くするのが本手で、さういふ意味から、圖の如く附け引くのである。そこで、白が㊂の手で、㊄の處に立てば、黒より㊃の處に切られるから、止むを得ず㊃と繼いだのである。さて又白は㊄の手で、「に」に尖む手もあるが、黒より㊄の處に跳ねられては、タマラヌ處だから、かく打つたので、この㊄のやうな處は、一局の消長に關する非常な大場であるから、白は是非出なければならぬし、白が手を拔いた時分には、黒も亦すかさず跳ねるべきものと、心得ておくがよい。

（第二圖）

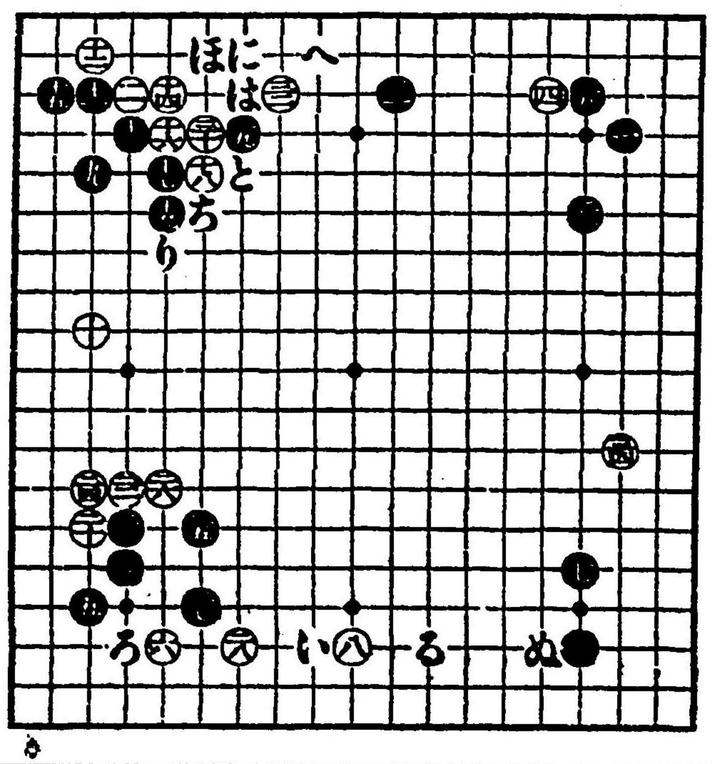


第三圖における黒㊄の手は、つまり先手を取つて、上方に轉じたいといふつもりである。しかし、㊅の手が「い」に在る時分には、「ろ」に尖み附けてゐるのが宜しい。白㊄は仕方のない譯であるが、黒は㊁と夾むやうな時には、先づ㊄と覗くのが手順である。ナゼならば、先きに●と在つて、後に㊄と覗けば、白は㊄と繼がずに、「は」に附けるからである。

白㊂は普通であるが、善い手である。若し此處を構はずにおけば、黒より「は」に下られるのが、ナカナカ大きいからである。しかし、㊂の手で「は」に跳ねるのは、宜しくないと心得ねばならぬ。一見すれば、㊂と打つた場合に、黒に「は」に下られると、困るやうに思はれるが、その時は、白は「に」に跳ね、黒が「ほ」に抑ふれば「へ」に掛繼いで、何でもないし、又黒が「と」の方に出れば、白も「ち」に出て、「り」の頭を跳ねるやうなことになつて、黒の方が惡いから、「は」に出る手は、ないものと見て宜しい。

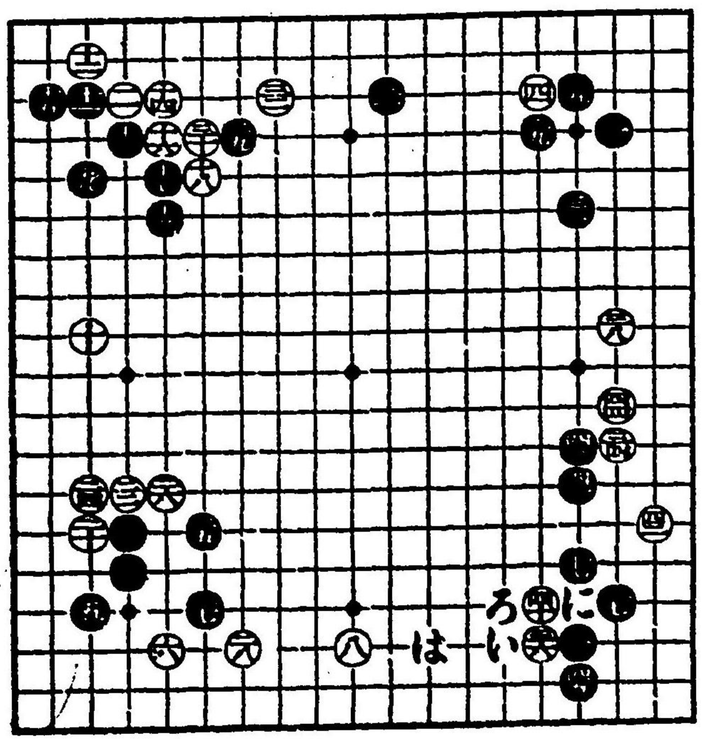
そこで、黒が㊂と打つたのは善い手で、㊄に尖み附けるのは無理である。しかし、白が㊄と打つた時は、●と尖み附けるのが大きい處である。尤も●の手で、白より「ぬ」に附けられぬために、「る」に打つこともあるが、㊄と㊅の間に打込みのない場合には、他に打つ方が宜しい。

（第三圖）



第四圖のやうに、白が㊇と附けたのは、黑に㊀の處に跳ねさせ、『い』に引いて、黑が㊁に打つた時『ろ』に曲つて、㊇の方に開かうといふつもりである。ゆゑに黑は其の趣向を見て、先づ㊂と一時引込んで、後に『は』に打込んでゆかうといふのである。

白㊇の手は、この場合全局第一の大場であるし、黑㊈の手は、一寸堅過ぎるやうであるが、非常に大きい處であるし、今急いで打つ處もないから、打つたのである。黑㊂の手は、七の黑と㊃の白とが、大桂馬になつてゐる場合には、かく飛ぶのが形であるし、白の㊄も亦形である。若し㊄の手で㊁に押せば、黑は手を抜くかも知れぬ。それに㊂と打つておけば、『に』の突込みもあるから、切りを狙つてゐる譯である。黑㊂は、㊁と下る前に、一著押して置くべきもので、即ち手順である。本局も亦かく㊁までの結果となれば、黑はやはり先著の効力十分である。

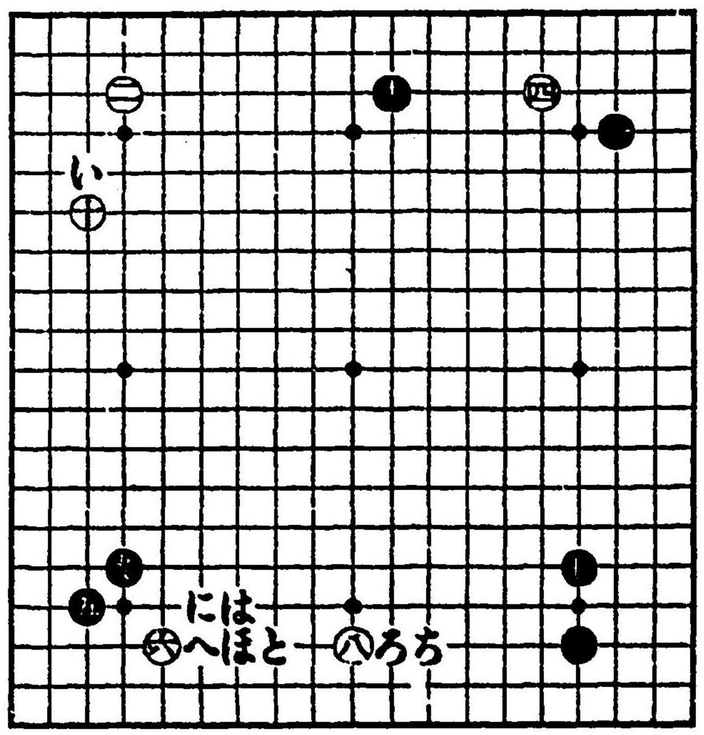


（第四圖）

第十四局

本局は、第十三局における、黑㊈の手よりの變化であるが、先の棊としては、第一圖のやうに㊀と尖む方が、『い』に掛るよりは確かである。元來白が㊅と打つたのは、黑が㊈と尖めば、手を抜かうといふ趣向の手であるから、前局においては、この手で『い』に掛つたのであるが、しかし、白が何と思ふにせよ、黑の態度として、かく尖んでもよい譯で、寧ろこの方が本手である。この時白が㊉に結つたのは、いはゆる大場である。しかし、㊅の石が、一路進んで『ろ』に在る場合には、毎毎說く通り、『は』に受けねばならぬが、本局は、元元手を抜かうといふ趣向であるから、かく大場を占領したのである。

黑㊈の手は、普通の大場を占めた譯で、その意味は、㊃の白を夾んで攻めながら、白地を消さうといふ手である。尤も黑は、この手で『に』に一つ掛けたい處だが、さすれば、白に『ほ』に受けられても、大したことはなし、又『へ』に受けられることもある。然るに、此處は『に』に掛けやうか、『と』に打込まうか、或は『ち』に詰めて『は』に受けさせやうかと、いろいろと趣向のある處で、いづれを取つてよいか分からぬから、先づ圖の如く㊈と夾んで、暫く成行きを觀望してゐる譯で、いはゆる老練の打方といふものである。

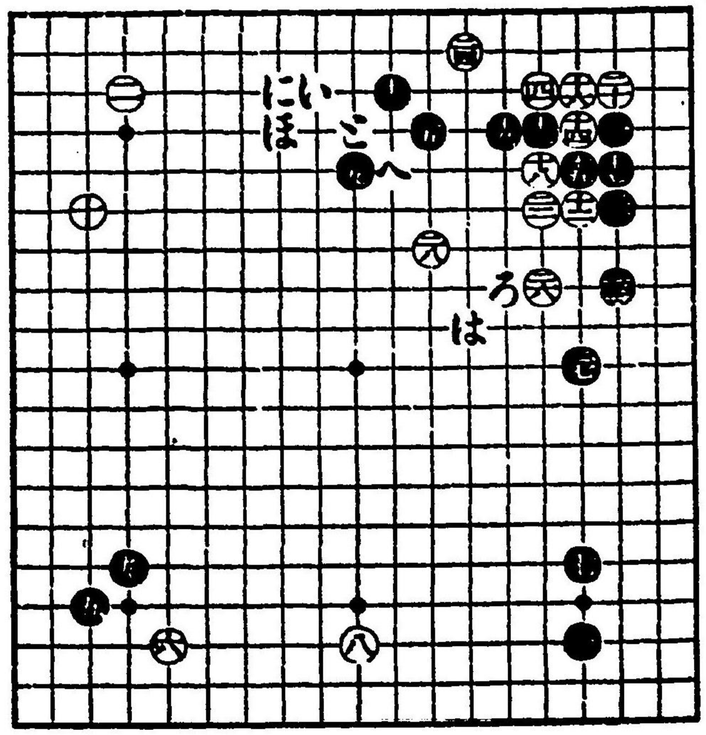


（第一圖）

第二圖における白㊀は、つまり趨向の手である。普通は、この手で「い」に詰めたい處だが、さすれば、黒に㊀の處に打たれて、餘りデカサナイことになる。さりとて手を拔けば、黒より㊁の處に尖み附けられて、損の定石となるので、黒にこの兩方の手を打たせまいといふ意味から、かく㊀と先鞭を著けて、黒の受手を見やうといふので、ここらが、いはゆる碁といふものである。若しここらでグヅグヅして、無事に經過すれば、白は勝つことが出來ぬから、この邊が白の最も考量を要する處である。

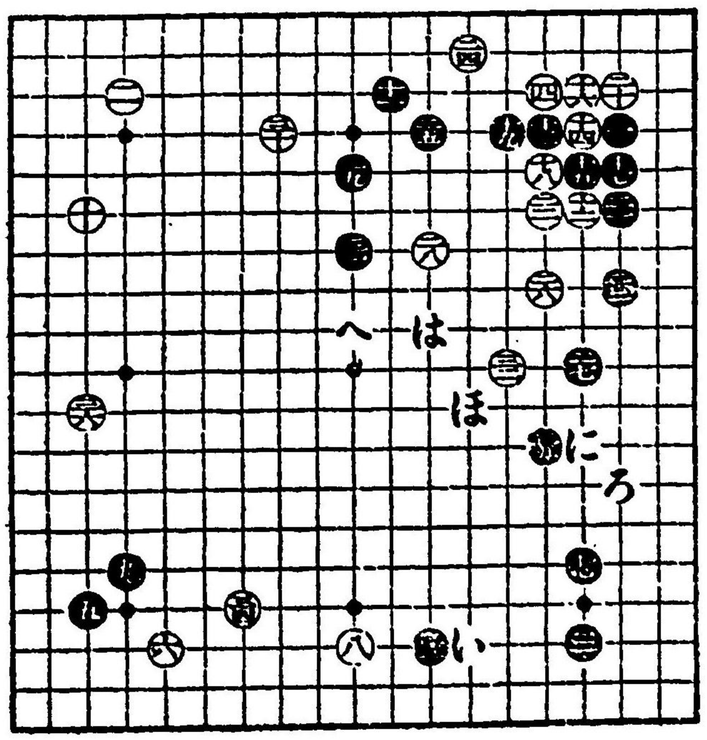
この時黒は、㊂の手で㊃に尖み附ける手もあるが、後に「い」に攻められるのがイヤであるから、圖の如く附けたので、㊄までは、止むを得ない手順である。白㊅㊆は、普通の手であるが、㊇の手でいろいろと趨向すれば出來るのである。則ち「ろ」に桂馬したり、「は」に打つたり、若くは㊈の處に打つたりする手もあるが、これは、普通の布石を示したのである。黒㊉も普通の手であるが、善い手である。この手で「に」に開きたいやうに思はれるが、それは、低くて面白くない。さりとて、若し「ほ」に打てば、白に「へ」に打たれて、「と」に受けねばならぬことになり、自由が缺けて來て、白を攻めるなどといふことは到底出來ぬから、面白くないのである。

（第二圖）



第三圖における白㊀の手は、いはゆる手筋といふものであるが、しかし、この手で「い」に詰めてゐるなども、亦穩かで善い手である。つまり、「い」に詰めるのは、やがて「ろ」に打込んでゆかうといふ手を、狙つてゐる譯である。白㊁の手は、凌ぎの手であるから、「は」に飛んでゐる方が確かであるけれども、白であるから斯く打つたのである。その時黒が㊂と詰め、先手を取つて㊃と爆つたのは、善い手順である。しかし、㊄の手は、全體白より「ろ」に打込まれるのを防ぐためであるから、「に」に飛んでゐるのが本手であるけれども、それでは、一向白に奪かぬからで、「に」に飛ぶくらゐならば、寧ろ轉じて㊅に開く方が、善いことになるのである。それゆゑ、少し危險のやうではあるが、かく打つて白を攻めたので、「は」の掛けもキイテゐる處だから、右下邊に多少の手があるにしても、たいしたことはない。この時白が一轉して㊇と打つたのは、いはゆる大場を占めたのである。㊈乃至㊉の中の白は、どうかかうか活きはあるし、さうさう一つの處に搆つてゐられぬから、かく大場を打つたのであるが、この手で「へ」に帽子に打つなども、亦面白いであらう。

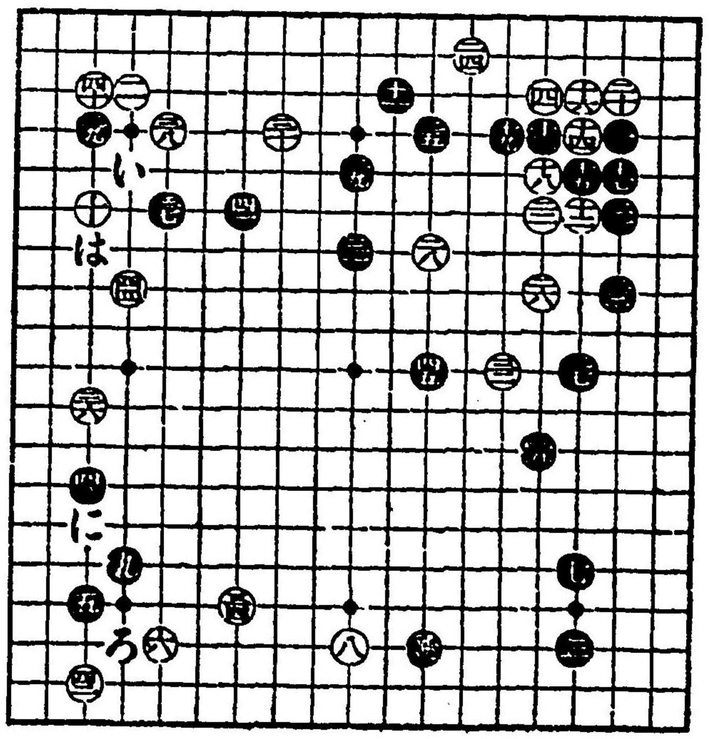
（第三圖）



第四圖における黒㊀は白の飛ぶ處であるから善い手で、斯る處を消すには、一番大丈夫でもあるし、且つ多く消すことの出來る手である。この時白は、㊁に受けるか、又は「い」に受ける處であるが、「い」に受けると、又㊀と㊂との間に乘せられるから、此處では、圖の如く㊁と受ける方が確かである。黒㊃は、白が㊁と受けた時、一つ打つて置くキマリの手で、後にはキカヌこともあり、打つておけば、幾分かためになることがあるのである。白㊄は止むを得ぬ手で、「い」に打つの宜しくない。若し「い」に打てば、隅にいろいろの手があつて、たとひ㊆の石を取つたにしても、得にならぬことになる。

黒㊅は、手堅くて善い手である。この場合「ろ」に尖み附けるなども、勿論大場ではあるが、中央の黒を追はれると、㊇以下の弱い白も丈夫になり、その結果、自然右邊に手が附いて來るから、かく手堅く打つたので、これらが、釣合ひのよいといふものである。その時白が㊈と得をして、㊉と圍つたのは善い手順で、どうせ㊈と打たなければ、黒より「は」に附けて來られる手があるから、かく打つたのであるが、碁によつては、㊈の手で「に」に詰める手もある。しかし、この碁では面白くないから、圖の如く打つが宜しい。つまり、かうして中の黒を、追ひおひにクスグッテゆかうといふのである。されば黒㊉は

（第四圖）



大に善い手で、つまり、中の黒をイジメられぬ先きに、かくして右邊の打込みをなくし、白がどう逃げるにしても、白の逃げるまでには、中の黒も丈夫になるといふ打方で、双方の黒が丈夫になつて、ヨセに移ることになれば、黒の方が善い碁である。しかし、白は何とか此處を凌ぐであらうし、その凌ぎ方によつては、黒は一方地であるのに、白は各處に地があるから、何ともいへない碁で、今度白の打つ手が、則ち勝負どころで、餘程面白い碁になるであらう。

半途より末は、十目の後手より、一目の先手と爭ふべし。吾地ばかり圍むは、領内の兵糧を運送するに均しければ、聊かにても敵地を破りて、吾地をまさんにしくはなし。孫子が所謂食敵一鍾當吾二十鍾則是也。

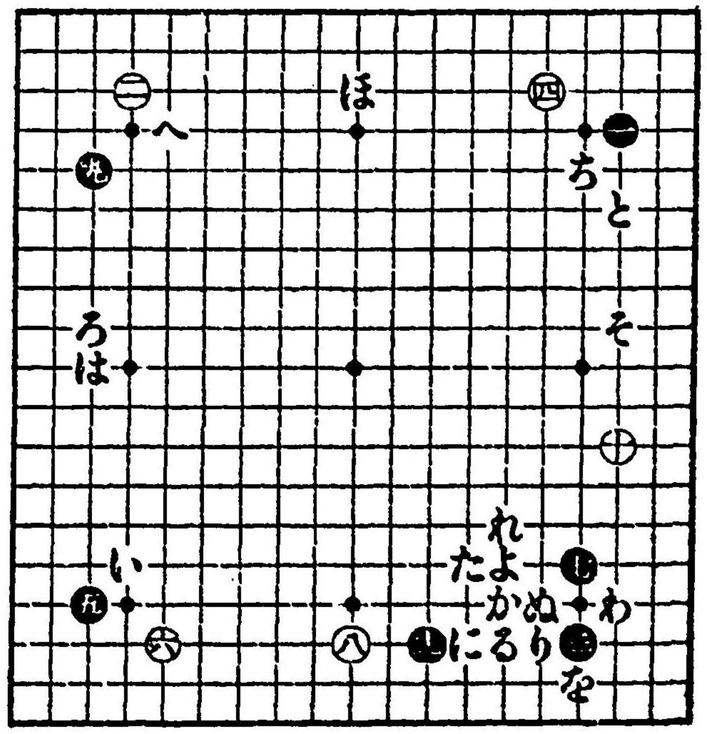
（幻庵因碩の「碁兵法」の一節）

第十五局

本局は、第十四局における、黒❶の手よりの變化で、前局では、この手で「い」に尖んだのであるが、いづれが善いかは分らない。つまり、其の時の趣向で、別の恭を打つことになるのである。

そこで、白は⊕の手で、趣向をしなくてはならぬが、既に隅の大場は濟んでしまつたし、ナカナカむづかしい處である。普通は、「ろ」に三間に夾むのであるが、「ろ」若くは「は」の方面は、「い」に尖んだ後でないと、黒よりは打てない處で、若し「い」の尖みのない中に黒が打てば、毎毎說く通り、白より「い」に掛けられて黒が惡いことになる。して見ると、白も亦、黒が「い」に尖んだ後に打てる處で、急ぐべき處でないから、他の趣向を取るべき處であらう。この場合、「に」に開くなども惡くはないが、「ほ」に開くことは出來ない。ナゼならば、白が「ほ」に開けば、黒より「へ」に掛けて來られるからである。よつて、同の如く⊕と打つたので、一の趣向とはいはねばならぬ。この⊕の手は、假りに黒が、第二圖のやうに、白より「と」に打たれるのを嫌つて「ち」に尖めば白は「り」に附け、黒が「ぬ」に跳ねた時「る」に引く。すると黒は、平常ならば「を」に下るべき處であるが、⊕の石があるので「わ」に控へねばならぬ。よつて白は「か」に曲り、黒が「よ」に跳ねた時「た」に跳ね返し、黒が「れ」に伸びた時、「そ」に開かうといふ趣向なのである。果してさういふことになれば、白は「に」に開く手を、一著儲けた譯になるから、さういふ風に打たうといふのである、それゆゑ黒は、❶の手で「ち」に尖みたいけれども、白の趣向の裏をかいて、圖の如く⊕と打つたので、黒白共に、僅に一手であるが、最も味ふべき、深い意味が存するのである。

（第一圖）

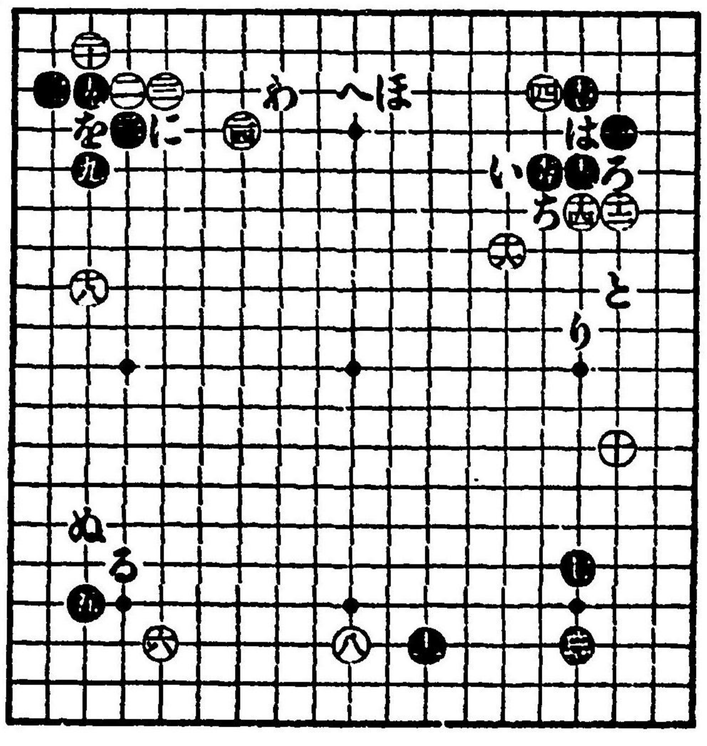


毎局に、吾手ばかりを考ふれば、おもひのほかに大敗をとることあり。敵の心となりて、考ふべし。孫子の所謂、知彼知己百戰不殆といへるは、千古の確論と謂つべし。

（幻庵因碩の「碁道兵法極」の一節）

第二圖における白㊀の手は、黒が㊁と打つて來れば、かく打たうといふ兼期の手で、黒㊂白㊃は當然の手順である。黒㊄の手は、「い」に飛ぶ手もあるが、此處では、圖の如く伸びる方が確かである、總じて、白より「ろ」に當てた時分に、「は」に繼がねばならぬ場合には、「い」に飛ぶのが善いけれども、圖の如く㊅と掛繼ぐことの出來る場合には、㊆と伸びるべきものである。

この時、白が㊇と桂馬するのは善い手で、「に」の尖みのない中は、「ほ」若くは「へ」の方面には打てないから、かく打つて黒を誘ひ出し、追ひおひに打たうといふのである。特に、かく㊇打つのは、㊉の手と相應じて、形勢を張る手であるから、非常に善い手で、釣合ひの上から言つても、亦大に善いのである。これに對する黒㊈も亦、落付いてゐて善い手である。斯る場合に、黒は㊉の手で「と」に打つて、白を「ち」に沿はせ、「い」に伸びて打つのも形であるが、この兼では、白の㊉の石があるので、「り」に掛けられて、取られて仕舞ふから宜しくない。白㊈は、他に打つ處がないから、㊉の石を夾んで攻め、黒の受方によつては、又「ぬ」に詰めて、㊉㊈のやうに打たうといふ趣向である。最初㊉の手でこの方面に打つのは、急ぐべき處でないと言つたが、今は㊁の黒があるので、黒の「る」に尖むのが、殆んど先手となるから、早く此の方面に著手する必要があるのである。そこで黒㊈は、早く㊁の石の沿まりをつけて、「る」に尖まうといふ手で、單に

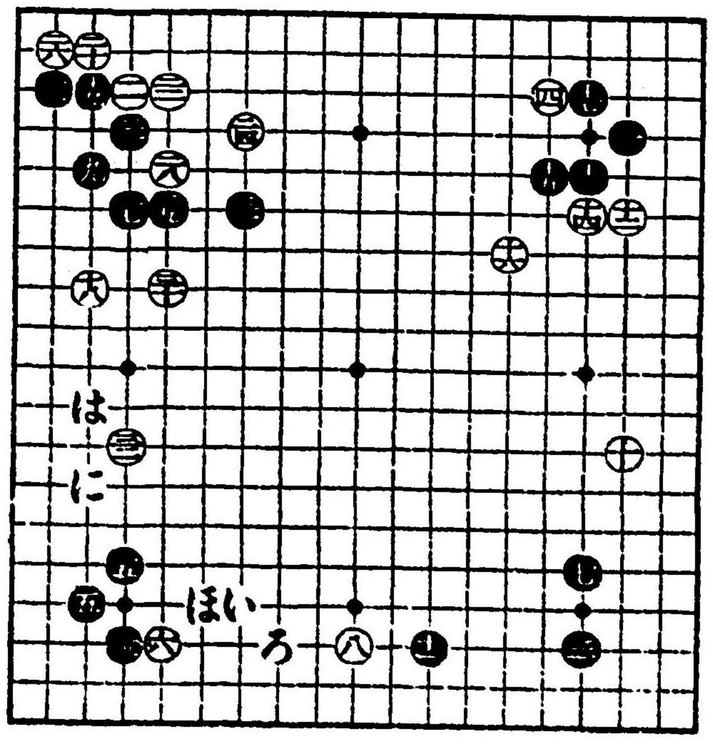


（第二圖）

「る」に尖めば、白より「を」に尖み附けられて惡いから、則ち先手を取らうといふ譯である。白㊀は、どうなるにしても、一つは打つべき手である。勿論「わ」に開く手と兩樣あるが、圖の如く㊈と在る場合には、かく打つ方が宜しい。

第三圖における黒㊀は、兼期の手で、善い手であるが、白㊁の手は、「い」に受けてゐるのが正しい手である。さうでないと、黒より「ろ」に打込まれて、困ることになる。けれども、「い」に受けてゐると、黒より「は」に詰められてマズイから、㊂以下左上隅の黒を攻め立てて激しく打ち、「ろ」の打込みをなぐさうといふ趣向で、平常は少し早いけれども、ここでは、さういふ意味で打つたのである。若し黒が手を抜けば、白は㊀の處に打つて、イヂメてゆくのであるが、さう打たれてはタマラヌから、黒も㊀と受けたのである。尤も黒は、㊀に打つ手もあるが、打つとすれば、やはり㊀に打つのが本手である。

その時白が、㊁と黒を追ひ、㊀と打つたのは、㊁と抑へる時からの趣向であるが、善い手である。そこで黒は㊀の手で、「ろ」に打込みたいけれども、㊀と白に打たれてゐるから、面白くない。尤も、「に」に一つ打つて見る手もあるが、「ほ」に掛けるのは、今更損であるから、黒を持つては、やはり圖の如く尖み附けてゐるのが確かである。



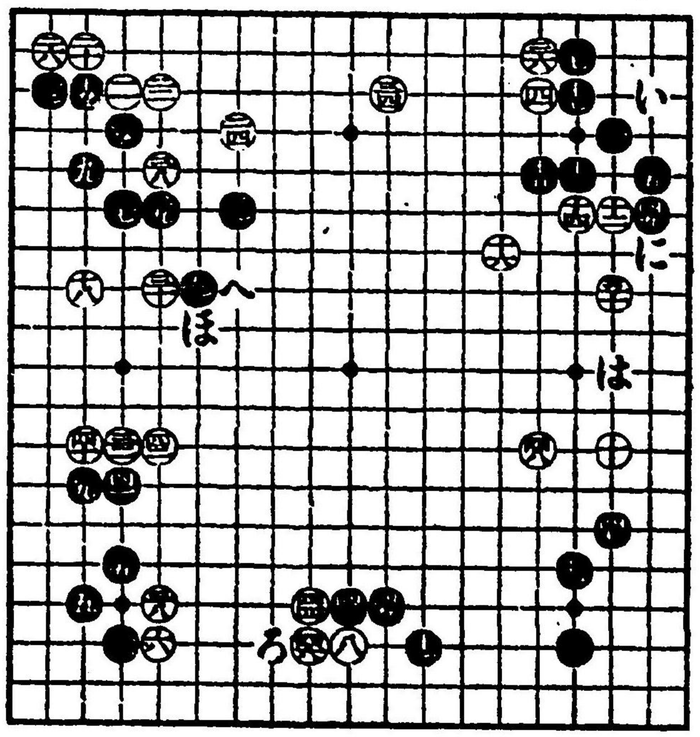
（第三圖）

第四圖における白㊱の手は、この場合における唯一の大場で、上邊を圍つた上、黒が手を抜けば、「い」に打たうといふ意味もあるのである。されば、黒も亦これを防いだ上に、右邊における白の模樣を消さうといふので、㊲と尖んだのである。若し白が消させぬと防げば、又上の方から消さうといふので、小さく見えるけれども、其の實は大きい手で、一寸打てない手である。

白㊱は、「ろ」の打込みを兼防した手で、いつまでも棄てておけぬし、今が其の時期であるから、打つたのである。そこで黒が㊲より㊴までの手順を運んで、㊴と締つたのは、自己の領域を確かにして、敵の虚を狙ふ譯である。白の㊳と㊴との間は、可なり廣いけれども、㊲と尖んでゐる以上、大した地にはならぬから、先づ㊴と締つて自から備へ、敵に打たせてから消すのが宜しい。白が若し、㊵の手で㊴に抑ふれば、黒は「は」に打込んでゆくから、白も圖の如く飛んだのである。黒㊶は善い手で、初學の中は、とかく「に」に飛びたがるけれども、それは、素人手といふものである。黒㊶は、釣合上打つた手で、白が「ほ」に跳ねて來れば、「へ」に伸びて打たうといふので、諸方の白の薄みを狙つてゐる譯である。

本局は、白が大に働いて打つたけれども、黒は手厚いのに、白は何處も手薄いから、細かい棊にはなるが、やはり黒の方が宜しい。そこで黒は、かういふ風になるのがイヤならば、●の手で㊲の處に打ち、白が㊴に抑へた時

（第四圖）



「ろ」に打込めば、兼形は全く變るけれども、激しくて一層導いかも知れぬ。しかし、黒はこのくらゐでも、勝つてゐるものであるから、少しもアセル必要はないのである。

伯爵林董題字
涙香黒岩周六序
畏軒内田三省跋
北洲土田政次郎著

圍棊哲學

（最新刊）

附錄（圍棊術語圖解　故田中五段略傳）

全一冊　紙數三百四十五頁　上等洋紙刷　正價金壹圓
製本頗美　クロース總　送料金八錢

圍棊の創始以來幾千年、和漢の棊書百を以つて數ふ。しかも、よく圍棊の眞理を道破して漏すなきもの、唯一の本書あるのみ。其の眞理を推して、これを一切の世事、人事に應用せんか、磐根錯節に處して惑ふなく、截斷縱横一毫も誤ることなけん。

理と技とは、自から異るあるも、よく理に通ずるときは、技も亦隨つて上達せん。今や俗臭紛々として天下に滿ち、趣味日に墮落して、殆んど停止するところを知らざらんとす。圍棊哲學の出づる、豈に徒事ならんや。

坐して聖賢の道を樂み、以つて靜かに其の心膽を練り、起つて社會に活動し、以つて優勝者の地歩を占めんと欲せば、須く本書に就いて學ぶべきなり。

發行所　棊界新報社

立三段
雲都
樂
石
胡桃正見
頭谷
山森
滿逸
題字
講述
編輯

一手千金 手筋解說（三版）

全一冊

南版和紙刷 著者肖像入 玉裝美且堅 正價七拾錢 送料金四錢

圍碁學書の順序は、先づ定石、布石を知るにあり。然れども、定石、布石は死物にして活物にあらず。これを實際の對局に應用し、其の場合を得るに於いて、始めて活物たるに至る。強者といひ、弱者と稱する、一に其の應用の如何にあるのみ。

然らば、これを適當に應用し、これを適當に活用する方策如何。名人上手の打碁を觀ぶる其の一なり、師に就いて指導を受くる其の二なり、朋友と對局する其の三なり。然れども、この數者を實行して、實力を養成せんには多くの年月を費さざるべからず。

然らば、其の年月を短縮して、實力を養成する方策なきか。曰く、必ずしもなきにあらず。よく『手筋』の何物たるかを解し、これを强記して實戰に應用する、是れ之れを達成の道となす。然れども、かの諸碁と稱するものの知きは、多くは支那傳來の作り物にして、實際打出す形に遠ざかれるがため、實利を收むる甚だ少し。

本書は、則ちこれと異り、其の大部分を名人上手の打碁に取り、近代の名人故本因坊秀榮の校閲を經たるものに、更に現代碁客の實戰に現はれしもの、及び古來諸解の諸碁をも加へ、一手一手に其の『手筋』を明解したるものなれば、初學者といへども、容易に『手筋』の何物たるかを解するを得べく、眞に斯界における未曾有の快著たり。有くも圍碁を學ばんと欲し、圍碁の上達を冀ふの士は、速に一冊を備へざるべからず。

發行所 東京市小石川區水道端町二丁目

互先 布石通解 第一卷（三版印刷中）

男爵千家尊福題字
五段岩佐銕道講述
樂
石
胡桃正見編輯

南版和紙刷 和裝美且堅 正價五拾錢 送料金四錢

布石は圍碁の根本なり、基礎なり。如何に定石を暗んじ、定石に熟練するも、根本たる布石の理を知らざる時は、其の定石を應用すべき時機、若くは場合を得ざるがため、甚だしきは本に竹を接ぐの奇觀を呈することなしとせず。斯の如きは、いはゆる定石の中毒にして、以つて定石を活用せりとはいふ能はず。蓋んぞ勝敗を爭ふの餘地あらんや。

ゆゑに、定石を活用せんと欲せば、よく布石の理に通じ、其の時機に應じ、其の場合に適ふを要す。これ布石は、其の着手全局の利害得喪に關するものなるに、定石は、僅に一隅の利害得喪に關するに過ぎざれば、なり。

それ斯の如く、布石が圍碁の學習上、最も重んずべき位置に在るに係らず、古來布石に關する眞書の乏しきは何ぞ。曰く、これ說明の極めて難きがためのみ。然るに、本書は岩佐五段の精密なる說明につき、細緻布石が其の熟練せる筆力により、一手一手に、其の利害得喪の理を明かにし、且つ其の含蓄せる意味、及ぶところの影響に至るまで、何人にも解し易からしめたるものなれば、敢は、師に就いて學ぶに當る點なしとせず。宜なるかな、この講解の一たび碁界に現はるゝや、天下の碁客靡然として其の風に習ひ、到る所其の風川を見ざるなきの盛あり しことや。今や謹めて一書を子となすに當り、吾人は古今を空しうする眞書なる を公言すると同時に、初學者の道に一冊を備へて、上達の資料に作せられんことを、切望して止まざるものなり。

發行所 東京市小石川區水道端町二丁目 碁界新報社

（振替貯金口座東京壹壹八貳貳番）

男爵牧野伸顯題字
五段岩佐銕道講述
樂
石
胡桃正見編輯

定石通解 第一卷

四版印刷中

菊判和紙刷 著者肖像入 裝釘美且堅

置碁附手の部 定價六十錢 送料四錢

古來定石に關する書籍は、汗牛充棟も啻ならざれど、其の多くは、單に形を示すのみにて、一手一手の意味を說明したるものなし。たまたま說明を附するものあるも、僅に『何の手吉』等とあるに過ぎずして、甚だしきは、『此處口傳』などと稱して、其の說明を避けあるを常とす。

然るに本書は、一手一手に就いて叮嚀親切なる說明を施し、其の利害得失を論斷して餘すなし。故に初學者といへども、容易に定石の定石たる所以を解するを得べく、眞に斯界における、破天荒の良書なり。

發行所 東京市小石川區水道端町二丁目卅一番地 碁界新報社

（振替貯金口座東京壹壹八二三番）

木堂犬養毅題字
五段岩佐銕道講述
樂
石
胡桃正見編輯

定石通解 第二卷

菊判和紙刷 裝釘美且堅

第三版

內容

置碁大桂馬三三打込の部
置碁大桂馬縱り打込の部
置碁大桂馬掛りの部
置碁大大桂馬掛りの部
置碁二間高掛りの部
置碁一間高掛りの部

定價金六拾錢 送料金四錢

右は第一卷と異ることなく、置碁の定石はここに完結せり。ゆゑに、第一卷を購求せられたる諸君は、必ずこの第二卷をも購求して、置碁定石の眞髓を知らざるべからず。

本社は普通の廣告の如く、虛僞の廣告を弄して、惡書を售らんとする者と異り、完全なる良書を作りて、斯道の進歩に貢獻せんとする目的なれば、苟も圍碁に志すの士は、速に第一卷と併せて、本書を備へざるべからず。

一たび定石通解の出づるや、世の定石に關する書籍は悉く顏色を失ひ、誇大なる廣告により惡書を求められし諸君は、今更の如く本書の發行の早からざりしをみつつあり。本社は其眼の士によりて、漸くその眞價を認めらるるに至れることを歎ずるものなり。

246
258

明治四十五年四月十日印刷
明治四十五年四月十五日發行

著作者　岩佐銈
東京府下千駄ヶ谷町八百五十六番地

著作者兼發行者　胡桃正見
東京市小石川區水道端町二丁目三十一番地

印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

東京市小石川區水道端町二丁目三十一番地
基界新報社

定價五十錢
送料金四錢

著作權所有

大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
同　京橋區尾張町　東海堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　日本橋區通一丁目　大倉書店
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　京橋區西紺屋町　良明堂
臺灣臺北西門街　杉田書店

發行所
基界新報社

子爵秋元興朝題字
五段岩佐銈講述
樂石胡桃正見編輯

定石通解（再版）第三卷

內容
一間夾みの全部
二間夾みの全部
三間夾みの一部
互先の部
（正價六十錢、送料四錢　體裁紙質等前卷に同じ）

曩きに第一卷及び第二卷を發行して、假説の定石を完結するや、滿天下の好評嘖々として、「定石通解」の外、又完全の書なしと喧傳せられ、速に互先の部をも發行して定石書を完備せられたしとの冀望、頻々として繁るが如くに到る。これ著者と本社と共に光榮とするところなり。

本社は、熱心なる同好各位の冀望を空しうせざらんことを欲し、年來の計畫を遂行して、爾來一年有餘の歲月を費し、互先定石の一部分として、今やここに第三卷を發行するに至れり。其の説明の懇切なる、印刷、文章の平易なる、毫も前二卷に讓るところなく、紙質、體裁、製本等また一として前卷と異るなし。

前二卷によりて、碁定石を學修せられたる諸君は、速に本書によりて、互先定石をも學修して、其の上達進歩の資に供せられんことを、敢て勸め切に望むものなり。

發行所　東京市小石川區水道端町二丁目　基界新報社

定石通解（三月五日發行）第四卷

江村松田正久題字
五段岩佐銈講述
樂石胡桃正見編輯

正價六十錢　送料金四錢
互先の部（紙數百二頁、紙質、製本、體裁等前卷と同じ）

これ第三卷の續篇にして、互先定石中、前卷に説き殘せる「三間夾み」を承けて完了し、新に「高目に對する小目掛り」「大桂馬掛け」一間高掛りに對する小桂馬夾み」を説き盡して餘蘊なし。

苟くも、圍碁學習の順序として、定石を知らんと欲せば、必ず前卷と併せて、本卷をも精讀玩味せざるべからず。「定石通解」の眞價は、世人既にこれを知る。本社は、自書自賛の必要なきに至れることを歎ぶと同時に、世人の讀書眼の、發達せることを祝せずんばあらざるなり。